

〔資料翻訳〕

雑誌『新青年』

鳥井克之訳

『新青年』と反封建の新文化運動

『新青年』は現代中国革命史上もつとも重要な雑誌の一つである。それは一九一五年に出版されはじめ、その後、数度の変動を経て、一九二六年になつて、ついに停刊した。前後合計して十年以上存在したことになる。それは中国旧民主主義革命の末期、旧民主主義革命から新民主主義革命への過渡期および新民主主義革命の第一次国内革命戦争の準備期にまたがっている。それは五四時代の反封建の文化思想運動とマルクス主義思想が中国に伝わり、それらが思想運動の主流に変わっていく過程を充分に反映している。五四運動および中国共産党創立の準備時期の中国の新聞・雑誌の歴史を研究するうえで、『新青年』はもつとも重要な刊行物である。

『新青年』が出版されはじめたのは、正に袁世凱がその帝國的支配の強化につとめ、帝制の茶番劇を演ずる準備をし、中国に対する日本帝國主義の侵略が日毎に深まり、中国の民族的危機がきわめて深刻となっている時期であった。辛亥革命という人びとの心の中で燃え上つた短い虚妄の希望はすでにうたかたのうちに消え、建國後、四年たった「中華民國」は眞の富強の道を歩まなかつたばかりでなく、「民国」の看板さえも風前の灯というべき状態にあった。このような情況は一部のブルジョア階級とプチ・ブル階級の知識

人には懷疑の念を惹起させずにはおかなかつた。かれらの第一の結論は、辛亥革命はけつして中国に民主政治をうち立てはしなかつたので、ブルジョア民主主義の思想を大々的に宣伝して、名実ともにそなわつた民主共和国の実現をかり取る必要がさらにあるということであつた。『新青年』こそはこのような背景のもとに、このような趨勢を代表して出現したものである。

『新青年』はその最初から封建主義に反対して民主主義を主張するスローガンを掲唱した。第一巻第一号に發表された發刊の辞としての性格をそなへた「青年に警告する」の一文は、青年に対して六項目の希望を提示している。すなわち、「自主的であつて奴隸的でない」、「進歩的であつて保守的でない」、「進取的であつて退嬰的でない」、「世界的であつて鎮國的でない」、「實質的であつて形式的でない」、「科学的であつて空想的でない」。五四時代の「デモクラシーとサイエンスの両先生」は実際にはすべてそれらを包括している。これは『新青年』の最初の綱領的な文献である。『新青年』は当時の人々が関心をもつてきた主要な問題、つまり袁世凱の帝制陰謀事件に眞正面から直接取り組むことはせず、「時事の政治問題を批判するはその主旨にあらざるなり」と言明していた。『新青年』は封建と帝制に反対して民主主義を主張する思想闘争が当時の主要な任務であると考え、現実の政治闘争を根本的な使命であるとは見なしていなかつたからである。このような観点はかれらに

はまだ正しい活路を探し出していなかったことを物語っている。しかし、それは反袁のスローガンを直接的には提唱しなかったけれども、それが進められている思想宣伝は、かえって反帝制の闘争と関連して一体となった。袁世凱が帝制の陰謀を行なった時、『新青年』は民主主義思想の宣伝に力を入れ、「唯民主主義」の國家の樹立を主張した。袁世凱が恥辱の中に死亡したのち、『新青年』は続いて起った帝制復活の陰謀に対してさらに一連の打撃を与え、中國にはまだ民主政治が実現されていないことを説明し、さらにブルジョア民主主義の政治的主張と封建的束縛に反対する自由主義的社会倫理の觀念を宣傳した。この闘争の具体的な功績は現実の政治的影響として存在せずに、それが封建制と礼教に反対する広範な思想闘争を展開したことにある。新文化運動初期の最初の大きな高まりは、まさにこのようにして形成されたのであった。

政治面での君主制度反対と思想面での反封建・反礼教は並行して起ったものである。袁世凱は皇帝と称する以前、すでに思想体系上から帝制の伏線を張りめぐらすために、天子と孔子を祭ることを提唱していた。袁世凱が皇帝と称した時に発行した『新青年』の文章の中にもすでに儒家の「三綱」と「忠・孝・節」などの奴隸道德に具体的に反対しはじめていた。一九一六年秋、保皇党の康有為は黎元洪と段祺瑞に上書して、「孔教」を「國教」と定める条項を憲法に入れるよう主張した。そこで『新青年』は続々と多くの文章を発表して、康有為に反対することから封建的倫理道德全体に対する批判にまで拡大された。この側面にはこの復古逆流はたしかに帝制復活の陰謀と密接な関係があり、しかもさらに重要なことは当時の進歩的な思想界には、中國に民主政治を実現させようとするれば思想革命あるいは当時論じられていた

「國民性の改造」が必要であるという、比較的普遍的な認識が存在していたことである。この認識は全面的なものではなかったが、それはまた正しい一面をもっていた。戊戌変法の時には民主主義思想を宣伝しないこともなかったが、その宣伝は封建思想との妥協の基盤の上で行なわれたものであった。辛亥革命の時にも民権（民主）主義のスローガンを提唱したことがあったが、当時においては、民主主義は民族主義と並べて提唱されたのであり、しかも実際にはむしろ後者の方に重点が置かれ、民主主義に対しては、それはただ議會政治の類いに見られる形式にすぎないとされ、封建思想に対する態度においては依然として妥協的態度をとった。封建主義思想はこれまでこういった重大な破壊を受けなかった。このことはたしかに民主政治を実現する上での障害であった。そこで進歩的な知識人は思想革命の大きな旗を掲げた。戊戌変法時代の「古えに托して制度を改める」から「五四」時代の「孔家店を打倒せよ」までは、中國の民主勢力がしだいに成長し、民主主義の要求が日まじしに成熟したことを反映している。これは歴史的意義をもつ進歩であった。

反封建・反礼教の闘争の中で、『新青年』において最大の努力を払った執筆者の一人が陳独秀である。かれは康有為等の一連の文章に反駁する中で次の三点を繰返し説明した。第一点は封建制と礼教は民主政治と両立できず、尊孔はかならず復辟を招き、孔子の思想は「現代生活」に適応できないということである。第二点は孔子を崇めて「孔教」を國教と定めることは、思想の自由の原則に違反するということである。第三点は「孔教」を國教と定めることは宗教と信仰の自由の原則に違反するということである。ところで、かれのもっとも重要な論点もまた封建制と礼教は民主政治と両立不可能とい

う点に集中しており、しかも思想面での反封建・反礼教を政治面での民主制度の主張と緊密に結合させて一体化している。かれは「孔子は封建時代に生まれ育ったので、提唱している道徳は、封建時代の道徳である。教え示している礼教、生活状態は、封建時代の礼教、生活状態である。主張している政治は、封建時代の政治である」と痛烈に指摘した。かれは「西洋式の社会と国家の基礎である、いわゆる平等と人権の新しい信仰を移入しようとするれば、この新しい社会、新しい信仰と相容れることのできない礼教に対して、徹底した自覚と勇猛な決意をもたなければならない。さもなければ阻止され移入されずに終るであろう」と考えた。これらの反封建・反礼教と民主思想を宣揚する宣伝は、当時の陳独秀が反封建闘争の中では決然とし、しかも徹底していたことを説明している。その後、かれは第一次国内革命戦争において、右翼日和見主義路線の誤りを犯し、最後には、党と革命に背くまでに発展して、歴史的な犯罪者となった。だが、五四運動前後においては、かれは思想運動の指導者および中心人物の一人として顕著な役割を果たした。

魯迅はやや遅れて『新青年』の活動に参加したが、一たび出現するや反封建闘争の中でもっとも徹底した、その影響がもっとも大きな思想家となり、この闘争においてきわめて目覚ましい役割を果たした。五四時代における魯迅の主なる著作の大部分は『新青年』に発表された<sup>⑥</sup>。かれの雑感・小説・論文は『新青年』の反封建闘争にさらに大きな高まりをもたらした。かれは生活に対する鋭敏な考察から出発して、封建制と礼教の罪悪を鋭く暴露して、解放の叫びを發した。かれの最初の小説『狂人日記』は、『新青年』での最初の口語文の創作小説である。それは特有の深刻さをもって封建制と礼教の「人を食う」性格を徹底的に暴き出し、革命的人道主義の立場で「子供を救え

と呼びかけている。魯迅の卓越した論文「私の節烈感」と「私たちは今どのようにして父親となったのか」およびかれの隨感録は、封建礼教と封建制度の罪悪を鋭く暴き出したばかりでなく、古いものはかならず新しいものに交替し、新しいものは古いものより「さらに意義があり、より完全に近いものであり、従ってまたさらに価値があり、より貴重なものである」という発展論の観点で、目覚めつつある人民を鼓舞している。正にこの時に、かれは自己の偉大な人柄と勇氣にあふれた宣言を代表するあの名文句「自分自身は因襲の重荷を担ない、暗黒の水門を背負いながら、かれらに広々とした明るい天地を開放する」を書いた。『新青年』に発表した魯迅の論文・雑感・小説が、青年の間できわめて熱烈な反応を惹起したことは、中国の革命思想史上のこの上もなく輝かしい大きな記念碑である。

正に瞿秋白が魯迅の思想について論じた時に述べた如く、この時、「進化論と個人主義がやはりかれの核心であった」のみならず、この時の進歩的思想界全体では、進化論思想もまた主導的な地位を占めて、前期『新青年』の多数の主な執筆者の文章の中に貫徹されていた。しかし、魯迅の進化論には顕著な特徴があった。当時、進化論思想が流行した形態はある種の社会ダーウソ主義式思想であった。陳独秀が『新青年』に発表した文章の中で、常に「生存競争」の原理を利用し、青年が「優勝」を勝ち取り、「劣敗」を回避するように激励するための理論的根拠としたのが、その典型的な代表である。この限度内においては、この思想は当時としては進歩的役割を果たしたが、陳独秀はまたこれから人民大衆の役割を極端に軽視するというかれの反動的観点を導き出すことにもなった。それより下にくだつてはさらに胡適とその他の一部の人々がおり、かれらは進化論の名を借り、各種の形態の反動

的主観的観念哲学およびその社会学、たとえば、ジェームスやデュイイ等のプラグマティズム、ベルグソンの「創造的進化論」などを宣伝した。これらの思想はいずれも『新青年』に反映されることとなり、プラグマティズム思想などは一時期は大いに流行することになった。魯迅の進化論はこれらとは異っている。かれは生物学を研究したことがあったので、進化論の本質をよく理解していた。したがって、かれは新しいものは古いものより素晴しく、新しいものがならず勝利すると信じ、そこから「だから祖先に対して子孫がする事は改めなければならない。〈三年父の道を改めざれば、孝と謂うべきなり〉は、当然、曲説であり、退嬰の病根である」という結論を導き出した。かれは進化論思想で国粹主義に猛烈な打撃を与え、人を食う礼教を暴き出した。かれもまた進化論思想から弁証法的観点に到達し、事物は発展するものであって停滞前進しないものではなく、しかも、これもまた正にダーウィン思想の貴重な中核であると考へた。エンゲルスはラプロフに与えた手紙の中で「ダーウィンの学説の中では、私は発展の理論に同意します。ダーウィンの証明の方法（生存競争、自然淘汰）については、私はそれはただ発見された事実の初歩的で、一時的で、不完全な表現にすぎないと考えています」と述べている。魯迅は正にこの「発展の理論」をしっかりと把え、ダーウィン進化論思想の科学的核心を明らかにしたのである。

『新青年』に封建礼教に反対する数多くの論文を発表したもう一人の執筆者は呉虞である。礼教は中国家族制度の産物であり、しかも家族制度はまた専制主義の拠点であると、かれは指摘した。かれは歴史的事実に基づいて封建礼教を封建権力と関連づけ、いわゆる「礼」がもはやすでに歴代の封建統治者の支配の道具になっていることを指摘した。この他に、かれも「聖人」

と見なされ、崇むべきと定められた孔子とその学説を経学の角度から大胆に直接攻撃した。これらはすべて当時にとっては相当に大きな役割を果たしたので、執筆者は「隻手で孔家店を攻撃する老英雄」と称された。

封建礼教に反対する思想闘争は、その目的が民主主義的思想的基盤を築くことにあったが、それは五四運動・新文化運動の中心的スローガンの一つであった。他の一つの中心的スローガンはすなわち科学である。この両者が合体したのがほかでもなく当時の進歩的思想界を震撼させた「德賽（デモクラシーとサイエンス）両先生」である。

「科学」というこのスローガンもまた『新青年』が出版されはじめた時から提唱されたものであるが、新文化運動の初歩的な展開がなされた後に、論戦上の必要性につれて、はじめて広範な意義を獲得したのである。この時、一方では、反動支配階級は迷信的心理を利用して封建的支配を強化することにつとめた（孔教を「国教」と定める要求もまたこの企みの反映である）。または迷信的心理を利用してあらゆる進歩的意味をもつ改革を阻止しようとした。他方では、反動支配階級の思想的支援者もまた、各種の鬼神や迷信のデタラメでもって新思想と新文化に反攻し、神がかり的攻勢が、一時流行し、鬼神の口を借りて新文化に反対し、ついには公然と「鬼神の説のびざれば、国家の命運ただちに縮まる」とさえ宣伝してはばからなかった。鬼神と迷信の思想は新文化運動の当面の敵となった。そこで、『新青年』は反迷信闘争の任務を担うことになり、刊行物に一連のいわゆる「靈字」を排斥し、鬼神は荒唐無稽の説であることを論証する文章を発表した。そこで、かれらを使用した武器が自然科学である。神権は封建思想と制度の重要な構成部分であり、反迷信闘争は実際には反封建闘争の一部分であり、科学と民主主義

この二つのスローガンは緊密に結合していた。五四時代の「サイエンス先  
生」は、その意義が主として自然科学の研究を提唱するばかりでなく、封建  
礼教に反対する民主主義の闘争を援助することにもあったのである。

「科学」というスローガンが反迷信闘争のためのものであり、無神論の宣  
伝であるからには、それはまた唯物論と観念論との間の思想闘争となるのは  
当然のことであった。当時の進歩的思想家は『新青年』に文章を発表し、自  
然科学の原理でもって、いわゆる形態と質量のない鬼神は存在不可能である  
ことを証明したので、素朴な唯物論思想を守り、無神論の立場を堅持した。

この限度内においては、われわれはこの時期の『新青年』は基本的には唯物  
論の論壇であったと言ってもさしつかえない。しかし、当時の唯物論思想は  
きわめて大きな歴史的制約を受けていた。客観世界を正しく反映する唯一の  
弁証法的唯物論思想はまだ中国には伝来しておらず、かえって十九世紀末か  
ら二十世紀初頭の各種の反動的観念論的哲学の流派が正に大量に流入して  
いた。『新青年』の主編者の陳独秀は基本的には唯物論の立場に立っていた  
が、各種の流派を眼前にして、観点がぐらつき、目標を見失ない、かえって  
それらを併合し吸収しようと企みた。この時の無神論の宣伝の中において、  
ある者は観念論的な心理学を武器として、いわゆる「霊学」に反対したが、  
さらに多くの人は鬼神や迷信に反対する時にはやはり比較的しつかりと唯物  
論の立場に立脚していた。しかし一度や複雑な若干の問題に遭遇すると、  
大抵は観念論哲学に救いを求めざるをえなかった。本物のマルクス主義の弁  
証法的唯物論の哲学は、マルクス主義の科学的社会主義の思想が移入される  
にしたがい、ややおくれて、しだいに中国に受容されることになった。

『新青年』のもう一つの功績は『五四』の文学革命運動を展開したことで

ある。『新青年』は出版されはじめたその時からヨーロッパのリアリズムお  
よびその他の流派の作家の作品を紹介していたが、それは文言文で外国語を  
翻訳していたので、林紘の従来の域を出なかった。一九一七年から、『新青  
年』は「文学革命」の大きな旗じるしを正式に掲げはじめると、前後してこ  
の問題について、陳独秀、錢玄同、劉半農、胡適などが文章を発表した。文  
学革命は文学の内容と形式の二つの問題を包括している。文学の内容に関する  
問題も、文学問題における反封建の思想闘争の反映にはかならない。この  
問題で、「文学改良芻議」を最初に提唱した胡適は実際にはこれといった役  
割を果しておらず、ただ「内容のあることをいう（復言之有物）」「やたらに  
深刻がぶらない（不作無病之呻吟）」といった類いの内容のないことを述べ  
ただけである。陳独秀の「文学革命論」は文学の改革を政治の改革と結合さ  
せて、「政治を革新しようとするならば、勢いこの政治を運用する精神界を  
占有しているわが国の文学を革新せざるを得ない」と考えた。かれの観点は  
明らかに胡適のそれを越えている。かれは自己の三大主張をかかげて、「装  
飾が満ちあふれる（文以載道）」ことに反対し、八股文の「聖賢の立場でも  
のを言う（代聖賢立言）」に反対した。これもまた文学が封建主義思想を宣  
伝する道具になることに反対せんがためであった。これは「五四」文学革命  
運動がその初期には実際には民主主義啓蒙運動としての側面をもっていたこ  
とを説明している。しかし、この問題における陳独秀の観点はやはり消極的  
なものであった。かれが文学でもって封建主義思想を宣伝することに反対  
し、「代聖賢立言」に反対したことは正しいことであった。しかし、かれは  
それから発展して文学の革命的改革の意義を軽視して、ブルジョア客観主義  
の「自然主義文学観」を主張し、結局は文学と政治の問題を正しく解

決しなかった。だが、五四文学革命運動は創作の実際的な成果でもってこのブルジョア文学観の制約を打破したのである。一九一八年、魯迅は『新青年』にかれの最初の短篇小説「狂人日記」を発表したが、掲載されるや、現実を批判する典型をうち立て、文学を反封建主義の思想闘争に直接奉仕させ、「文学革命」の本当の成果となって現れた。魯迅は当時まだ文学革命の理論建設に力を注いではいなかったが、かれの創作の成果こそが「文学革命」運動の伝統を本当に代表していることがはっきりと理解される。

「文学革命」の第二の内容は口語文を提唱して文言文に反対した運動である。口語で書かれた文学作品はかなり以前からすでにあったが、清末になるとさらに大量の口語文の新聞・雑誌が出版され、また一部のある者は口頭語と書面語との統一といったスローガンを提唱した。しかし、真剣に口語文を提唱し、それを運動にまで高めて、決定的な勝利を収めたのは、「五四」時代になってからのことであった。『新青年』こそはその運動のリーダーであった。それは口語で書かれた文学作品を提唱する論文を発表しただけでなく、口語の文学作品を発表し、その後さらに完全な口語文の刊行物に変わってしまった。この時、民族・民主革命運動が高まるにつれて、われわれの民族共通語の長い形成過程が強化されはじめ、『新青年』が口語文を提唱することもまた民主主義的な改革全体の呼びかけと同時に発せられたので、その展開もきわめて迅速なものとなった。口語文の出版物と口語で書かれた文学作品も日を追って多くなり、標点符号の採用もまた『新青年』の提唱によってしだいに始められ、完成されたものになった。これらの改革は革命思想の伝播、文学創作の発展あるいはまた国民教育の推進に対して、きわめて素晴らしい役割を果たしたのである。

『新青年』が封建主義思想に反対する闘争の中で行なったこれらの大闘争は、一九一八年の終りになると、当時始まったばかりのマルクス主義の宣伝（これについては次の節で説明する）と共に、きわめて強烈な反応を引き起した。一九一九年一月『新青年』第六卷第一号に「本誌の罪状についての答弁書」が発表され、封建勢力全体が新思想の群生に対して攻撃したところの非難に回答し、この時期の『新青年』の宣伝に対する現実的な総括を行なった。「答弁書」の中で「その事件の発生の原因を探索するに本誌の同人は無罪である。ただあの徳莫克拉西（Democracy）と賽因斯（Science）両先生を擁護したのために、あのいくつかの非常に大きな罪を犯すことになった。あの徳先生を擁護しようとするれば、あの孔教、礼法、貞節、旧倫理、旧政治に反対せざるを得ず、あの賽先生を擁護しようとするれば、あの古くさい芸術と宗教に反対せざるを得ず、徳先生を擁護しまた賽先生を擁護しようとするれば、国粹と旧文学に反対せざるを得ない」と述べている。かれらは封建礼教に反対するために次のような畏れを知らない決意の程を表わしている。すなわち「われわれはいまやこの両先生のみが中国の政治、道徳、學術、思想上におけるあらゆる暗黒を救済することができると考えている。もしこの両先生を擁護したのために、政府のあらゆる抑圧と社会のあらゆる攻撃嘲笑を受けて、たとえ首を斬られて血を流そうとも、断じてそれを回避するものではない」。この猛烈にして断固たる反封建主義の宣伝は、たしかにすでに封建思想の檻を打ち破り、啓蒙運動としての役割を果たし、広範な青年と女性が封建制度の束縛から脱却しはじめ、新思想を追求する青年の情熱を呼びさまし、中国の問題を解決する新しい糸口を努力して探求するようになった。前期の新文化運動は中国における社会主義思想の伝播のために道を切り開いた。こ

の時期の『新青年』は新文化運動の創始者であり、封建主義思想に反対する主要な陣地であり、急進的民主主義者の戦闘の旗手であり、その功績は中国の定期刊行物の歴史の頁に永遠に書き留められるものである。

### 『新青年』と中国におけるマルクス主義の伝播

ところで、正に毛沢東同志がかつて指摘した如く、中国のブルジョア階級に力がなかった事と世界がすでに帝国主義の時代に入っていたために、ブルジョア階級の新文化は外国帝国主義の奴隸化思想と封建主義の復古思想の反動同盟の面前では真の勝利を勝ち取ることは不可能であった。一九一五年から一九一八年までの間に、月刊『新青年』はいくつかの反封建主義の戦闘を勇猛に行なったが、しかし、それはまた同時に若干の重大な根本的欠陥を帯びていた。何よりもまずそれは一般的な民主政治のスローガン以外には、民主政治をどのようにして具体的に実現するかに対して何んらの具体的な方策を提唱できなかったことである。多数の人々は政治を論じないことを提言した。一部の人たとえば陳独秀は政治問題を討論しようとしたが、かえって北洋軍閥、進歩党、国民党によるいわゆる「平均政權」という極端に誤まった主張を提唱したことがある。この主張ではもちろん北洋軍閥の支配をまったく動揺させることはできず、はてはかえって、悪人の手先となる役割を果すことになった。これは正に民主政治を実現する物質的力を見とどけることができず、民主政治を実現する具体的方法を提唱できなかった結果である。もしこの欠点を克服できなければ、初歩的に展開された思想闘争をさらに高度な要求にまで発展させ、中国問題を真に解決できる道を指摘することは、不可能である。同時に、当時の封建主義思想に反対するために用いられた思想

的武器は十八世紀資本主義が上昇期にあったブルジョア民主主義思想から二十世紀独占資本主義時代の帝国主義思想まで包括しており、各流派が次から次と後を絶たずに現れたが、後者がもっとも現代的かつ進歩的であると自任したので、その悪影響がもっとも大きい。しかも毛沢東同志がかつて指摘した如く、この時の新文化運動の主要人物の中には、まだ完全にはマルクス主義的批判精神を備えておらず、厳格な形式主義的方法が流行していた。「これらは現状に対し、歴史に対し、外国の事物に対し、史的唯物論の批判的精神をもたず、悪いといわれるものは絶対的悪であり、すべてみな悪く、良いといわれるものは絶対的善であり、すべてみな良いとした」。この時、全面的に西洋化した論調が『新青年』に担当顕著な地位を占めていた。当時流行していた思想はそのようなものであり、これらの思想に対する人々の態度もまたそのようであったので、前期『新青年』は反封建主義闘争できわめて大きな勝利を収めると同時に、また深刻な危険をもはらんでいたのである。『新青年』編集部の中で胡適をはじめとする右派が帝国主義の奴隸化思想と封建主義の復古思想の反動同盟の有力な支柱に変わってしまったことこそ、この危機の歴史的証拠である。

しかしながら、世界はついに社会主義革命の時代に入り、中国労働者階級もついに成長しはじめた。十月革命は中国にマルクス・レーニン主義をもたらし、当時の新文化運動に新しい血液を注入し、ただちにまったく新しい様相を帯びさせることになった。『新青年』もまたこの過程を反映し、それにしたがって質的変化を起こした。この時から、中国革命はしだいに新民主主義の段階に入った。月刊『新青年』もしだいにマルクス・レーニン主義を宣伝する刊行物に変わった。この偉大な変革の先駆者こそ、中国のもっとも初期

のマルクス主義者であり、中国共産党創立者の一人である李大釗同志である。

『新青年』が出版されたばかりの頃、李大釗同志はまだ日本にいたが、すでに『新青年』に寄稿しはじめており、反封建思想の闘争に積極的に参加した。かれが一九一九年に書いた論文「青春」こそは『新青年』において最初にしてもっとも有力に青年を反封建主義に駆りたてた論文の一つである、この論文において、かれは二千年来の封建社会が中国にもたらした危害の実態をば指摘した。かれは「この長き歴史は、積れる塵に重圧され、その生命の桎梏となり、衰退したるに、また何故にいみはばからないのか」と書いている。しかしかれは問題点は「老いたる中国の死なざるを恭恭しく弁証するにあらず、青春の中国の再び蘇るを休まずして育むにあり」と考えた。そしてこの「回春」の方法こそ「革命」なのである。もちろん、かれが当時見出すことができたものはやはりブルジョア革命にすぎなかった。かれは当時のトルコの「青年の政治運動」を指摘したり、「インド革命の烽火の一筋が、長くたなびく」を見出しており、また中国の辛亥革命について論及し、これこそが正に「その民族の青春を蘇らせる」ことが可能であると考えていた。かれは革命の希望を青年に托し、青年に「過去の歴史の網の目をつき破り、陳腐な学説の罫いを破壊し、死せる屍白骨に、現在の活潑なる我を束縛させることなく、現在の青春の我を縦横に進ませて、過去の青春の我を撲殺せよ」と呼びかけた。さらにかれらは「歴史の桎梏をつき破り、歴史の積れる垢を洗い流し、民族の新しき生命を造り、民族の青春を挽回せん」ことを要求しているが、これらは反封建の戰鬥的精神の表れである。この論文の卓越した特徴はやはり革命的樂觀主義の情熱が充満し、また不完全ではあるが、しかしすでにきわめて鮮明な弁証法的觀點が貫かれていることにある。李大釗同志

のこの時期の思想の中に見られるいくつかの特徴は、かれがすでに革命的民主主義者としての高さに到達したことを表わしており、それはかれが中国でもっとも初期のマルクス主義者の一人になった重要な原因でもある。このような時に、かれは日本から帰国し、『新青年』の積極的な寄稿者となり、編集委員の一人になったのである。

十月革命は人類の歴史上に一つの新しい紀元を展開し、また中国革命にも決定的な影響をもたらした。中国人民は最初のうちは帝國主義の通信社の歪曲と中傷の報道によって、十月革命の実態を徐々に認識するしか他に方法がなかった。これらの報道の中から十月革命の実態をもっとも早く探求したのがすなわち李大釗同志である。かれはきわめて不完全な記事にもとづいて一度で十月革命の本質に触れたのである。一九一八年十一月に、北京で第一次世界大戦勝利を祝賀する大衆の記念集會が催されたが、かれは天安門広場で「庶民の勝利」と題する演説を発表し、十月革命の勝利を賞賛した。同月発行の月刊『新青年』第五卷第五号にこの演説原稿とかれのより詳細な論文「ボルシェヴィズムの勝利」が発表された。この二篇の論文は中国のもっとも早いマルクス・レーニン主義の文献となり、それらの発表もまた『新青年』が新しい歴史的時期に移行しはじめたことを象徴している。

李大釗同志のこの二つの論文は第一次世界大戦の勝利は一体何人の勝利なのかという問題に回答するためのものであった。この問題の提起は当時においては重要な意義をもっていた。十月革命が成功してからは、帝國主義と軍閥はボルシェヴィズムを極力中傷し、これを「過激主義」と称して、十九世紀ヨーロッパ反動派の「財産と妻を共有にする」といった類いのタワ言を蒸し返し、中国に対するその影響を阻止しようとした。第一次世界大戦の勝利



ののち、参戦の名目を借りて内戦の実を上げた北洋軍閥はまたしても勝利祝賀を勝手気ままに仰々しく行なって、自己の勢力を増大させようとしたが、これは当時にあつては多少ともかなりの人を迷わす役割を果たした。このため、この問題に正しく回答することは、一方ではこのもつともよい機会にマルクス主義を宣伝し、同時にまた帝国主義と軍閥の陰謀と詭計を暴き出すことでもあつた。李大剣同志はこの問題に回答する時に、次のように指摘した。すなわち、第一次世界大戦には二つの結果がある。一つは政治的結果であり、『……大主義<sup>⑥</sup>』の失敗、民主主義の勝利であり、他の一つは社会的結果であり、『資本』主義の失敗と社会主義の勝利である。連合国側の帝国主義は形式的には勝利したことになったが、「かれらの政治的運命として、ドイツの軍国主義と同じように間もなく消滅することを憂慮していた」。また第一次世界大戦の勝利は「民主主義の勝利であり、社会主義の勝利であり、赤旗の勝利であり、世界の労働者階級の勝利であり、二十世紀の新しい潮流の勝利である」とかれは指摘している。かれはボルシェヴィズムとは何かを解釈して「かれらの主義は革命的社会主義であり、かれらの党は革命的社会党であり、かれらはドイツの社会主義的経済学者マルクスの思想を信奉するものである」と述べている。かれは当時のヨーロッパに広まっていた革命の高まりを看取し、ドイツ、オーストリア、ハンガリア、ブルガリアでは「革命の情勢はロシアとほぼ同じであり、赤い旗が到る所で翻り、労働組合が次々と成立し、それはまったくロシア式の革命であり、二十世紀式の革命であると言つてもさしつかえない。このように滔々と流れる潮流は、実に現在の資本家の政府では到底防ぎきれぬものではない」と指摘している。このため、かれは満腔の自信をもって中国人民に「ロシア革命は天下を驚かし

た秋の桐一葉にすぎず」、「試みに将来の全世界を考察するに、必ずや赤旗の世界である」と宣告している。李大剣同志はかれの論文でマルクス・レーニン主義の勝利の讃歌を唱い、中国革命の前途を予言した。

正にこの時期に、山東問題に関するパリ講和条約のニュースが中国に伝わった。「大変奇怪なことに、何故に先生方はいつも学生を侵略するのだろうか？」。中国人民はもともとこれまでにならぬ多くの教訓を受けたが、現在またもやさらに深い教訓を受けとめて、帝国主義と北洋軍閥政府の本当の姿を徹底的に認識しはじめたという側面が存在する。もう一つの側面は、当時のプロレタリア階級の革命は今正に高まりつつあり、中国人民は「間のあたり」……ロシアのプロレタリア階級がすでに社会主義国家を樹立し、ドイツ、オーストリア（ハンガリア）、イタリア三国のプロレタリア階級が革命的であるのを見たので、中華民族解放の新しい希望が生れた」。これらのすべては李大剣同志の判断を充分に実証した。ここにおいて、「五四」運動が勃発し、社会主義思想の伝播もまたこれを阻止しえない程に勢のよい情勢を形成しはじめた。中国革命史上の新紀元はこれから始まった。李大剣同志の卓越した論文「庶民の勝利」と「ボルシェヴィズムの勝利」は当時の民主主義的な文化運動にまったく新しい内容を注入した。新文化運動の中の一部の人々の観点にはすでにますます鮮明な反帝国主義と反北洋軍閥の色彩をそなえ、若千の人々は中国問題をマルクス主義の観点から考察することを学びはじめた。このような初歩的な共産主義思想を抱き始めた知識人は月刊『新青年』の主要な読者である青年学生の中で日ごとに多くなつていった。李大剣同志は北京大学において進歩的知識人のマルクス主義学習を推進するために努力したが、今ではさらに進んで『新青年』によってマルクス主義を系統的に宣

伝するに至った。第六卷第一号より、『新青年』に編集委員会が成立し、順番に編集を担当する方法が実施され、李大釗同志はかれが主編した第六卷第五号をマルクス主義研究の特集号として編集し、この学説に対する注目を喚起させようとした。かれ自身長編の論文「私のマルクス主義観」を書いた。この文の中でかれはマルクス主義の政治と経済闘争の学説、史的唯物論という三つの側面の基本的観点に対して簡潔な紹介をした。これはまた精密で完成されたものには程遠いが、しかし、マルクス主義思想の主要な構成部分を確実に包括した論著であり、文中ではマルクス主義の基礎を築いた人たちの主な著作の若干の主要な断片を紹介した。この仕事は当時としては非常に必要なものであった<sup>⑤</sup>。このようにして、『新青年』がしだいに社会主義を宣伝する刊行物に転じていく過程が始まり、それにつれてまた「五四」時代の新文化運動の統一戦線を具体的に体現していた『新青年』編集部がしだいに分裂する過程が始まった。周知の如く、「五四運動」におけるブルジョア知識人であり、また運動における右翼の代表的人物でもあったのはあの悪名高い胡適である。かれはアメリカに留学していた時から『新青年』に論文を書きはじめ、一九一七年帰国後に、『新青年』の常連の執筆者となり、編集委員会の一人名となった。かれは「文学改良獨議」などのいくつかの文章を発表し、若干の改良主義的要求を提唱し、かつこれらを展開して、「文学革命」を提起したことによって、当時にとっては一定の影響力をもち、あるなにかの積極的役割を果たした。しかし、新文化運動におけるかれの一切の活動が、文学改良から始めたのは、正にかれ自身が述べている如く、その目的は結局のところやはり反動的な主観的観念論のプラグマティズム哲学を宣伝するためであった<sup>⑥</sup>。もし最初のうちは、マルクス主義思想の伝播がまだ開始されていな

かったので、胡適は帝国主義の理論を宣揚する上でまた間接的に行なっていたというのであれば、マルクス主義の宣伝がすでに開始されたのちは、かれはまたプラグマティズムの旗じるしを正面から打出してマルクス主義者と大衆を争奪することになるであろう。実は李大釗同志が「ボルシェヴィズムの勝利」を発表した後、胡適はすぐに『新青年』に「不朽（一九一九年二月、六卷二号）」と「実験主義（同年四月、六卷四号）」の二つの論文を連続して発表した。前者はかれの政治上（形式的には人生観についてであるが）の「叔世主義<sup>⑦</sup>」を主として宣伝したものであり、後者はかれの哲学におけるプラグマティズムを宣伝したものである。それは急速に目覚めつつあり、かつ中国問題を解決する正しい方法を努力して探求しつつある人民に向って、世界はきわめて僅かに少しづつ成長してきたものであり、必要とされるものもまたほんの僅かの少しづつの改良であって、抜本的な解決の可能性を否認することを吹聴していた。「五四」運動が勃発したのち、革命的知識人の社会主義思想を追求する情熱の高まりはさらに拡大して、胡適の反動的容貌もまた公然のものとなった。この時、盛大な運動の中で、大型の『新青年』は一時出版不可能となり、『每周評論』が当時もっとも影響力の大きい新聞タイプの刊行物となった。一九一九年六月、『每周評論』の編集者が逮捕され、胡適が主編者の地位を奪い取るや、あの悪評の高い「より多く問題を研究し、主義を論ずることをより少なくしよう」という一文を発表し、マルクス主義に公然と攻撃をしかけた。この攻撃は李大釗同志の反撃を受け、これより、新文化運動の統一戦線内部の異なる発展傾向がしだいに明らかにになり、その分裂過程もしだいに公然化し始めた。この分裂は月刊『新青年』にそれは一体どちらの側に立脚するののかという問題を投げかけた。

最初にこの問題に回答したのは、一九一九年十二月に発行した『新青年』第七卷第一号に発表された「本誌宣言」である。宣言が発表された時には個人の署名がなかったが、実際の執筆者は陳独秀であった。宣言はまず先に「世界中の軍國主義と金力主義はすでに限らない罪惡を造りあげ、今や放棄されるべきものになったと、われわれは信じる」と表明している。ここでの軍國主義とは帝國主義を指しており、金力主義とは資本主義を指している。これからもわかるように、宣言は大体において社会主義の方向を確定していたが、觀念がまだ比較的模糊としていたがために、表現もあまり適確ではなかった。宣言はまた新文化運動の革命性を強調し、繼續して成見を打破し、旧い観点を破棄し、新しい觀念を樹立し、『新青年』のこれまでの伝統を繼承する必要を言明した。宣言の中にも政治に対する態度が表示され、「われわれが主張するのは民衆運動であり、社会改造であり、過去および現在の各政党党派とは絶対に關係を断絶することである。」と述べ、「政治は重要な公共生活であることを承認し、かつ眞の民主政治は必ずや政權を人民全体に分配するものである。よしんば制限を設けたとしても、それは職業の有無を基準としたものであって、財産の有無を基準としたものではない」と言明した。このようにしてこれまでの政治についてまったく論じないようにするという姿勢を否定した。このような態度は、『新青年』がこの時には政治面では基本的にやはり民主主義を堅持することを表明したが、同時にまたいくらか社会主義的傾向を反映している「民衆運動、社会改造」などの語は、五四運動の大衆デモの闘争経験を明らかに肯定した。最後に、宣言はまた「自然科学と実験哲学を尊重して、迷信と妄想を排除することは、われわれの現在の社会が進化するうえでの必要条件であると、われわれは信ずるものである」と

声明する。一方では新文化運動の反迷信の唯物論の伝統を繼承し、他方では主観的觀念論のプラグマティズム哲学を明らかに肯定したが、これはかなりの程度、陳独秀の主張を反映したものである<sup>⑤</sup>。総体的に言えば、『新青年』第七卷第一号の宣言はきわめて大きな過渡的性格を反映した文献であり、それは他方では大体において社会主義的傾向を肯定し、五四運動の反封建的民主主義の伝統を保持しつつ、五四革命運動の経験を受け入れていた。他方では、多くの問題に対処したブルジョア民主主義的観点を温存し、ブルジョア階級の不徹底性を完全に克服してないがために、またプラグマティズムの危険性を見破れずに、胡適一派と新文化運動の統一戦線を維持し、厳しい批判も加えなかった。この文献は『新青年』が民主主義的刊行物から社会主義的刊行物に変わっていく過渡期の状態を物語っている。

しかし、この宣言は「社員全体の共同意見」を代表し、かつその後参画する社員も共同責任を担うものであると言明していたが、実際にはかえって折衷の産物にすぎず、しかも本質的に相互に対立する観点を長期間いっしょに寄せ集めておくことは不可能であったので、この統一戦線の分裂も実際にはこの時からすでに明確なものとなった。この宣言の発表と同時に、胡適は「新思想の意義」の一文を書き、かれの観点で新文化運動の範囲を規定した。それはつまり「問題を研究し、学理を移入し、国故を整理し、文明を再び造る」ことであり、さらに「より多く問題を研究し、主義を論ずることをより少なくする」という一文に見られる反動的な説教に發展した。これは新文化運動の統一戦線内の右派分子が正に帝國主義の奴隸化思想と封建主義の復古思想の反動同盟の側にまで墮落していたことを具体的に反映している。これは公然とマルクス主義に反対して、「大層な〈剩余価値論〉にはほんの少し

も研究の興味をも感じない」と言い、かれは緩慢なる進化、部分的なる改造という改良主義的観点を継続して宣伝した。他の一部の人たちの様相はまったく正反対であった。李大釗同志は第七卷第二号にかれの「経済上から中国近代思想變動の原因を解釈する」の論文を発表し、史的唯物論の観点から新文化運動の根本的原因を説明しようとした。かれは中国社会経済に対する帝国主義の侵略にとくに重点を置いて指摘し、「世界の資本家階級が世界のプロレタリア階級を抑圧している現象」を指摘して、中国問題を世界革命の問題と関連づけて考察する試みを重ねて行なった。この二つの論文はブルジョア知識人を代表する胡適がかれの反動路線を継続させ、李大釗同志に代表される初歩的な共産主義思想をもった革命的知識人がマルクス主義の宣伝に積極的に従事するという明らかに相対立する二つの傾向を示している。新文化運動の統一戦線を具体的に体現している『新青年』編集部内に二つの異なった道がはっきりと発展しており、この中から新しい変化が発生しないわけにはいかなかったのである。

この時こそ、まさに中国人民の革命運動が急速に深まり発展した時期であった。五四運動は青年学生によって最初は惹き起されたものではあったが、その基本的特徴はかえて「中国の労働者階級、学生大衆および新興の民族ブルジョア階級によって組織された陣営」が当時出現したことにあり、また労働者階級が一九一九年六月三日の最初の政治ストによって五四運動の反帝反封建の闘争に参加し、一個の独立した政治勢力の階級として中国の歴史の舞台に登場したことにある。これより、中国革命の新しい段階が始まった。一九二〇年になると、五四運動の直接的行動（デモ、産業スト、都市スト）は終熄したが、運動そのものは実際には終ってはおらず、かえて、こ

の時から新しい深化が始まった。一部のマルクス主義的知識人は労働者の中に入り、労働組合（当時用いられた名称は「倶楽部」であった）を組織し、労働学校を設立し、実際の労働運動に従事した。中国の労働運動はマルクス主義思想と結合はしはじめ、「労働運動」の呼び声は全国に広がり、中国における社会主義の伝播はしだいに深まり、中国共産党創立の準備活動が始まった。このような発展は『新青年』に充分に反映されることとなった。一九二〇年五月一日、『新青年』第七卷第六号は「メーデー記念」特集号として出版され、紙面も通常の各号よりも二倍以上も増頁された。この特集号は『新青年』がさらに明確に社会主義刊行物としての方向に発展しはじめたことの始まりを明瞭に指し示めていた。『新青年』編集部内部に同時に共存していた二つの傾向の競合において、社会主義の側が必ず勝利することがすでにこの号によって、その基礎が築かれたのであった。

『新青年』のメーデー記念号の主要な内容の一つは、李大釗同志が書いた「メーデー運動史」である。この論文はメーデーが生まれた経過と各国の労働者階級の八時間労働制実施のための闘争の歴史を紹介した。かれは当時の中国の労働者階級の任務について詳細な論述を行なわなかったが、切々たる願望だけは表明していた。しかし、当時の中国の労働運動はすでにその初めから組織的に発展し、まさに世界の労働運動の情勢を理解しようと渴望し、メーデーの意義を理解したので、この論文は当時であってかなり広範な好評を得て、多くの刊行物に全文が転載されるところとなった。この号の『新青年』にはさらに「ロシア・ソヴェト連邦共和国労働法典」の全文が訳載され、働かざる者食うべからずと各人にはすべて労働権があるという社会主義の原則および労働者の各方面の利益に対する社会主義国としての保障と配慮

が記述されていた。この号のもう一つの主要な内容の一つ、それはその最大の特徴であるが、それは大量の紙面を使って全国各地の労働者階級の生活と闘争の状況を掲載したが、この部分だけでも全紙面の半分以上を占め、通常の一号分を越えていた。これらの資料の中には上海、天津、無錫、唐山等の工業都市の産業労働者の状況報告もあれば、各省各都市の産業労働者と手工業労働者、運輸労働者等の状態の報告が含まれており、あるものにはかなりの統計資料が添えられていた。これらの報告は全般的にはまだマルクス・レーニン主義的な分析は見られなかったが、資本主義の罪悪を人びとに直視させるに充分なる、有益な資料が多く含まれていた。しかも、このような相当な規模の調査・研究それ自体も当時の革命的知識人が労働者の中に入って得た初歩的な成果であることを証明している。この号の紙面にはさらに若干の労働者の題辭が掲載されていた。最後に、この号にはさらに附録としてソヴィエト・ロシア政府が中国人民と政府に発した通告および中国各大衆団体と各新聞社のこれらの通告に対する反応が掲載されていた。これは歴史的意義のあるまとまった文献集である。ソヴィエト・ロシア政府は通告の中で、再三ソヴィエト・ロシアは帝制ロシアが中国で取得した一切の特権と中国と結んだ密約を破棄する旨を表示し、両国人民の友誼を回復させることを提案している。この通告は人民の前に広範に伝播して、帝国主義と北洋軍閥の封鎖を打ち破り、中国に対するソヴィエト国家の真に正しい態度を人民に認めさせることになった。当時の各進歩団体と進歩的傾向の新聞・雑誌等の刊行物は次々とソヴィエト・ロシア政府に打電あるいは文章を発表して、「中国人民は一部の極めて頑迷な官僚・軍閥・政治家以外は、すべてロシア人民と手を携えることを願う」ことを表明し、ソヴィエト・ロシアとの国交樹立を要

求することにより、中ソ人民の深い友誼のほどを表わした。ソヴィエト・ロシア政府の通告が事実でもって、「反動支配者どもがボルシエビキを「過激派」と中傷して言いくろめていくるめているデタラメぶりを暴露したことによって、中国において社会主義思想を伝播するうえで大いに便宜を与えた。

この頃、北京、上海等の地では、マルクス主義研究会、研究グループと中国共産党発起人グループがすでに活動しはじめており、中国社会主義青年団も成立を宣言し、『新青年』もまた中国共産党上海発起人グループの機関刊行物になっていた。一九二〇年七月、『新青年』は第八巻第一号を出版したが、編集部の主だった人々の論説には、その政治的態度は第七巻第一号の「本誌宣言」よりも一歩前進していた。基本的にはすでもはや一般的な民主主義の観点から問題を考察せずに、マルクス主義的態度と革命者の立場を擁護することを肯定する旨を表明し、「革命的手段で労働階級（すなわち生産階級）の国家を建設し、あの対外および対内的な一切の略奪を禁止する政治と法律を創造することが、現代社会に一番必要になっていることを認めるものである」と宣言した。これ以前には、初歩的な共産主義思想をもった知識人はマルクス・レーニン主義の理論、十月革命の基本的経験および新生のソヴィエト共和国の施策のいずれについても、まだあまりにも知っていないことが少なかった。このため、マルクス主義を学習し、ソヴィエト・ロシアの実際の状況を紹介することが当時の切迫した要求となった。この要求を満足させるために、『新青年』は第八巻第一号より「ロシア研究」特集コーナーを設けはじめた。当時収集することのできた英、米、仏、日などの新聞雑誌のソヴィエト・ロシア革命に関する論文および実際の情況の資料を訳載した。この時期に、『新青年』はレーニンの著作のいくつかの訳文<sup>⑧</sup>とレーニン

に関する紹介と印象記、ソヴィエト・ロシア政府の施策の資料、労働組合運動の情況の報道、婚姻法や婦人・児童の状態の紹介、文化教育政策および発展情況の説明、電化計画の紹介、ゴルキーのいくつかの文章、ソヴィエト・ロシアにおける外国人の見学印象記等を発表した。第九卷第二号には、李大剣の「ロシア革命の過去と現在」の論文が発表され、ソヴィエト・ロシア政府とその指導者レーニンが詳細に紹介された。それには六頁にわたるレーニン小伝と主要著作目録が含まれていた。これらの資料はまさにマルクス・レーニン主義思想を熱心に追求し、ロシア人の先進的業績を模範とする事を希望していた人びとが心から求めているものであった。このような資料をたえず発表することによって、共産主義思想の宣伝はより一層拡大・発展されることになった。

思想界におけるブルジョア階級の代表的人物はつとめて中国にマルクス主義が広範に伝播するのを阻止しようと企てた。これらの人物のなかには、最初は封建主義思想に反対する共同戦線に参加したが、一度マルクス主義が広範に伝播しはじめると、かれらの主要な闘争の鋒先をマルクス主義者の側に向転換させる者がかなりいた。かれらにはマルクス主義に公然と反対した胡適一派がいたばかりでなく、さらには一群の改裝したブルジョア改良派が存在し、「社会主義」の旗じるしを掲げて社会主義思想に反対した。これら偽社会主義者は政治面で「研究系」と密接な関係のある数種類の新聞雑誌で、このマルクス主義思想に反対する宣伝攻勢を展開した。その中の主要なものに『時事新報』と半月刊『解放與改造』である。かれらはまず張東蓀に出馬させて、「中国を救うにはただ一つの道があるだけである。一言でこれを語れば、つまり富力を増加させることである。しかるに富力の増加とはすなわ

ち実業を發展させることである。なぜならば中国の唯一の疫病は貧困に他ならないからである」といった論調を宣伝した。このことはつまり、かれらは資本主義の發展こそが中国を救う唯一の道であると考えているということである。しかし、資本主義制度の潰瘍がすでに救いがたいことを多くの人が認め、社会主義思想がすでに進歩的思想の主流になっている時に、公然と資本主義を主張したのでは人びとの共感を得ることは不可能であることをかれらも知っていたので、かれらはもともと社会主義を主張するものであるなどという詭弁を弄したのである。ところで、「中国では多数の人びとが輻かきになることを求めてもそれが叶えられない状態にある」。このため、「まず第一歩としてこのような職を求めて得られない人びとを社会よりなくすべきである。そうしてこそはじめて抵抗能力がつく。後日、それが労働と資本の両階級のいずれかにみな属し、階級戦争(闘争)が生じても、それは一歩進歩したことになる」。もし社会がこのような段階にまで發展しなければ、「社会主義の理論は決して人びとの耳に入り、その心を動かすことはできない」とかれらは言うのである。そこで、かれらは社会主義者に讓歩することを求めて、資本家に「実業を發展させる」という反動的説教を提唱した。このような反動的論調がこの時に出現した原因にはそれなりの深い社会的根源があった。帝国主義は第一次世界大戦中は東洋を顧みる暇がなかったので、中国の資本主義経済はその数年間にかんがりの好景気の様相があった。このことは中国ブルジョア階級の中に複雑な変化を惹き起こした。それらは一方では力の増長によって一定の時期、反帝反封制の運動への参加を可能にした。他方ではまたこのことによってある種の幻想を惹き起こした。つまり、かれらは帝国主義の侵略が中国の経済的独立を妨害していることを認めないというので

はなく、ただやはり民族資本主義がその狭間で成長できることを希望するというのである。張東蓀等の論調はつまり後者の傾向を反映している。かれらは「欧米の資本主義が倒れなければ、中国には解放の日は永遠に訪れないこと」を承認していたが、まだ中国には帝国主義を打倒する力がないので、「[已]を得ずただ外国資本のもとでその間隙をぬって実業を開発するしかない」と信じていた。これは中国ブルジョア階級の軟弱無力で憐幸を願う心理を反映している。これと同時に、十月革命の勝利、中国の五四運動における六月三日の労働運動の隆盛、中国におけるマルクス主義の広範な伝播もブルジョア階級の恐怖を惹き起こし、ロシアの道を歩むことになると憂慮したため、かれらはボルシェヴィズムに極力反対した。張東蓀等もこのような憂悶気を充分に察知していた。かれは一方では「労働主義」は中国では決して実現されないと断言しながら、他方では労働大衆の中で今まさに成熟しはじめている革命的要求を本能的に感じとっていたので、「憂慮すべきことは、これらの民が生計を立てえなくなった際に、ある種の偽の過激主義が出現するであろう。……その時に呈せられる状態は必ずや吾人の推しはかることのできないものとなるう」と中傷して述べている。要するに、この類いの論調はブルジョア改良派の軟弱無力ぶりと試行に心をはずませて、狭間から発展を求めようという幻想を反映しており、またプロレタリア階級と勤労者農民に対するかれらの仇恨と恐怖を反映している。この論調は日まじに高まる社会主義運動に抵抗するために提唱したかれらの反社会主義的な綱領である。かれらは決して孤立しておらず、かれらはアメリカ・プラグマティズムの積極的充込み人胡適<sup>①</sup>と一方では手をたずさえ、他方では当時ちょうど中国で講学していたイギリスの観念論者ラッセル<sup>②</sup>と手を結んでマルクス・レーニン主義

に反対する戦線を結成していた。一九二二年二月になると、『解放與改造』を半月刊『改造』に改編し、改編後の第六期の中で、かれらの反動的思想に対する批判に回答するために、ついに「社会主義研究」特設欄を別に設け、研究系の頭目梁啓超自身が、「(張)東蓀の社会主義運動論に答えて」の一文を書き、張東蓀の反動的思想を支持し宣揚した。しかもとりわけ、かれの資本主義発展、労資協調実施の改良主義的綱領の提唱に力を入れ、プロレタリア革命に反対した。この反社会主義的な攻勢はプラグマティズムの攻勢と同様に、新文化運動統一戦線内部から発生したものであり、しかもあたかも社会主義に「賛成」していると思られる人びとの口から発せられただけに、世間を惑わす一定の力をもっていた。このため、中国におけるマルクス主義思想の広範な伝播を保証しようとするれば、このような反動的逆流を克服することが、当時の急迫した任務となったのである。

『新青年』こそこの反動的思想の逆流の面前に社会主義思想を守る大旗をうち立て、第八巻第四期より、多くの論文を連載し、梁啓超、張東蓀等の反動的理論に反駁し、五四運動後の社会主義思想に関係ある大論戦——『社会主義討論』を展開した。当時、マルクス主義擁護の立場に立って偽社会主義者に反対した人びとは、主として次の三点からかれらの反動的観点に反論した。すなわち、第一に、「資本主義的生産制度は一方では勿論、富を増加させるが、一方ではかえって貧困を増大させる」という資本主義制度の血腥ぐさい搾取的性質を指摘した。かれらは欧米各国のプロレタリア階級の貧困と中国の「搾取されている勤労者が実質的にはまだ人間並みの生活をしていない」という事実を根拠として、張東蓀等の偽社会主義者が説く、資本主義の発展こそが中国人に人間並みの生活を保証するという論調の偽善性を証明し

た。第二に、かれらは、中国はすでに欧米帝国主義国の経済的侵略の下に陥ちているので、中国で資本主義を発展させ、国家を富強させて祖国の独立の保障を希望することは不可能なことであると、正しく指摘した。かれらは「中国は万国の市場であり、各資本主義国の競争の焦点であり、世界大戦争の戦場である。産業が非常に低い状態にあり、また各国の政治的経済的なさまざまな勢力の下にある中国では、資本主義を発展させようとすれば、資本主義国と経済戦争を起すことになり、恐らくこの上もない程に収拾がつかなくなるであろう。梁任公がこれこそが唯一の行うべき道であると考えていることは、かえってどうやら空想にすぎないようだ」と指摘している。第三に、労資協調の改良主義は「勤労者を奴隸的状态に安じさせ、反抗させない」ようにするものにすぎず、梁啓超等が偽善的に宣揚している「資本家を矯正する」という幻想は人を騙く道具にすぎないことを指摘した。なぜならば、「国家は資本家によって維持されており、ジェントルマン・スタイルのインテリゲンチアは資本家の庇護を受けているので、社会改造論者の空言には何んら益する所がないからである」。社会主義社会を樹立しようとすれば、ロシアの道を歩まなければならない。かれらは当時それを「労農主義の直接的行動」と称していた。このように、当時マルクス主義の立場に立って、この論戦に参加した人びとは若干の基本的論点において偽社会主義者の欺瞞性に正しく反駁し、社会主義思想の大旗を守り、マルクス主義思想伝播の道に横たわる障害を取り除いた。これは『新青年』の重大な貢献であった。しかし当時この論戦に参加した人びとはマルクス主義についての知識が充分なものとは言えなかったばかりか、あるいくつかの側面ではきわめて一面的であり、すこぶる誤解している点が多かったことを、指摘しておかなければなら

ない。同時に、かれらは中国革命は世界プロレタリア革命の一環であること直感的に認識していたが、中国革命の実態を真剣に研究することはまだまったく行なっていない。これらの理由によって、かれらが梁啓超、張東蓀等の反動的主張に反駁する論点の中にも重大な誤りが含まれていた。これらの誤りの最も主なるものは、かれらがマルクス・レーニン主義に対して余りにも不完全な理解しかまだもっていなかったことにより、中国社会に対してはまだ科学的認識をもてなかったことであった。したがって、中国革命の性質についても正しくない判断を下すこととなって現れた。かれらは当時の中国社会の半封建半植民地性と革命的民主主義的性質を理解していなかったがために、中国革命はプロレタリア革命であり、革命の任務はプロレタリア独裁を樹立することであると単純に考えてしまった。これは勿論正しくない結論であるが、これはまったく理解できることである。つまり、マルクス主義思想がやっと広範に伝播しはじめ、マルクス主義者がまだ極めて幼稚であった時代の特徴であるからである。

張東蓀等はこの論戦で自分自身を社会主義者に偽装してマルクス主義に反対した。かれは自分たちが主張するものはギルト社会主義であると標榜した。このギルト社会主義の鼓吹こそまさに当時の帝国主義思想家が中国におけるマルクス主義思想の伝播を破壊しようとする主要な方法の一つであった。前後して同時に中国に「講学」に來た帝国主義学者デューイとラッセルはいずれもある程度ギルト社会主義を宣揚したことがある。それというのも、この学説が温存している封建的要素はかれらが中国を半封建半植民地状態において、帝国主義の略奪に役立たせるといふ實際的目的を達成させる上で最も便利であったからである。そこで、張東蓀もこの宣伝の忠実な代理人



となったのである、ただ最初のころは、かれにして見れば、この主義について「我々の子孫がそれを認めることができるか否かはまた問題がある」ので、ただ何よりもまず資本主義を發展させるほかないというのである。かれの社会主義思想に反対する態度が『新青年』によって暴露され、資本主義發展のスローガンがすでに人心を得ることがまったく不可能になったことが証明された後には、かれはそこでギルト社会主義の宣伝をより一層前面に押し出してきたのである。一九二二年以後、張東蓀等は『時事新報』に發表した「社会主義研究」と題する特設欄で、ギルト社会主義思想を宣伝するという方法で、マルクス・レーニン主義反対に力を集中していたのである。相当長期間にわたり、『時事新報』はギルト社会主義宣伝の新聞であった。この反動的な活動は『新青年』、半月刊『先駆』（中国社会主義青年団の機関刊行物）と『民国日報』副刊の『覚悟』の激しい攻撃を受けた。『新青年』はこの主義に反駁した時に、「ギルト社会主義を主張することは、とりもなおさず資本主義の別名を主張することである。……ギルト社会主義を主張する人びとこそ心の中では資本主義を主張しようとしながら、公然と大胆に勇氣をもって資本主義を主張できない卑怯者である」と指摘している。この論戦ではまだギルト社会主義の危険性とその社会的根源を深く暴露していなかったが、境界線を明確に引くという役割を果たした。これ以前には、当時のマルクス主義擁護の人びとの多くはまだ何も知らずに各種の社会主義を自称する思想を友人と見なしており、はてはマルクス主義陣営内の流派と見なしていたが、この論戦によって、かれらはギルト社会主義の反動性を認識し、マルクス主義とギルト社会主義との間に境界線をはっきりと引き、したがってこのような反動的な思想の影響を阻止することが可能になった。

この時期に、もう一つ相当広範囲に伝播し、かつ反マルクス主義的役割を果たした思想が無政府主義である。無政府主義思想が中国に移入されはじめてのは遠く二十世紀初頭のことである。五四運動前後に、クロボトキン一派の無政府主義思想は「相互扶助論」によって社会ダーウイン主義思想に反対する便法でより広範に伝播できたのである。中国には広範な小ブルジョア階級の各階層とその知識人が存在したが、表面的には資本主義に反対して、あたかも社会主義の原則に合致し、しかも所謂「正義」「平等」「自由」の「恒久」の原則を標榜するこの主張は、かれらの極端な個人主義的傾向の習性に極めて合致した。この思想の伝播は一定の社会的根源をもつものであった。一九二〇年に中国社会主義青年団が成立した時、北京と上海にはいずれも一部の無政府主義者が団にまぎれ込んだために、社会主義者の隊伍内部でも無政府主義思想反対の闘争が発生せざるをえなかった。この闘争は『新青年』にも若干反映された。『新青年』第八卷第一号が改組され中国共産党上海発起人グループの機関誌となった時に發表された「政治について」の論文において、無政府主義反対の態度が明らかにされ、「ブルジョア階級が恐怖しているものは自由社会の学説ではなく、階級戦争（闘争）の学説である。……もし労働者階級自身が永遠に国家や政権は欲しくないと言えれば、それこそブルジョア階級はもちろんこの上もなく感謝にたえないということになる」と指摘している。一九二一年九月以降に出版された『新青年』第九卷第四号にも陳独秀と無政府主義者区声白との論戦の六通の長文の往復書簡が發表され、「無政府主義討論」の特集号となった。この討論はいくつかの論点で「無政府主義者の党はブルジョア階級の好き友である」という実態にも触れていたが、大部分の言論は法律を根本的に廃棄しうるか否かという形式上

の繁瑣な議論に変わっており、多くのブルジョア民主主義的理論の観点が混じっていた。『新青年』の無政府主義思想反対の闘争はその進め方が不徹底なものであり、当時『新青年』編集部を指導していた陳独秀はこの闘争を単純に社会主義内部の闘争であると見なし、しかも終始一貫して無政府主義の反革命の実質を暴露することがなかった。とりわけ許すことのできないことは、一九二一年以後、無政府主義者が広州で出版した機関刊行物『民声』はすでにマルクス・レーニン主義に向って攻撃を仕掛け、「もっぱらマルクスとレーニンを罵った」。しかるに陳独秀は「無政府主義討論」のなかで、かえってまだ実際から遊離した繁瑣な空論をかれらと交わしていた。これは当時の党組織が無政府主義思想に反対している実状を充分に反映しうるものではなかった。

『新青年』が五四運動以後に行なった三つの反マルクス主義に反対する闘争の状況は以上のようなものであった。

このように、『新青年』は十月革命の影響の下に、五四運動を経て、しいマルクス・レーニン主義思想を宣伝する刊行物に変わっていった。この時期には、初歩な共産主義思想をもっていた知識人は理論的にはまだ極めて幼稚なものであり、ロシア革命の知識についても余りにも乏しく、中国社会の実態に対しても理解に欠けていたので、この刊行物にはやはり多くの欠点があった。そのいくつかのマルクス主義思想を宣伝する文章の中には多くの非マルクス主義的観点が混入していたし、あるいはいくつかの反マルクス主義的観点を誤まってマルクス主義陣営内の流派と見なしていた。『新青年』は新文化運動の右翼であるブルジョア知識人の観点とはすで大いに疏遠なものになっていたが、かれらに対してもまだ批判を加えず、決裂を表明せず、依然として

形式的に統一戦線を維持し、胡適等の文章を掲載することを続けていた。とくにラッセルが中国に講学にやって来た前後には、『新青年』は二号分の主要な紙幅を費いやして、かれの経歴、著作目録および論文の抄訳を紹介した。その中にはかれがソ連を見学した後に発表した反ソ的の文書が含まれており、そのために誤まって有害な観点が影響力を拡大した<sup>⑥</sup>。しかし、全体として見れば、『新青年』は当時の最も有力な社会主義宣伝の刊行物であり、きわめて大きな役割を果たした。その欠点は二次的なものであり、時代的制約がもたらした結果であった。一九一九年から一九二一年までのこの二年間に、社会主義の宣伝が一種の流行となり、各種のブルジョア階級、小ブルジョア階級の「社会主義」思想がマルクス主義と共に続々と伝来し、玉石混淆となり、偽物と本物の区分がつかなくなった。しかも初めの頃は、多くの人がともちように目移りがして詳細に分析する暇がないという状態であった。このような時に、『新青年』はしだいに明確にマルクス・レーニン主義思想宣伝の刊行物になり、しかも諸説が入り乱れ、真偽が見定めがたい環境の中でギルト社会主義、無政府主義等の反マルクス主義の流派と必要不可欠なる闘争を行ない、改良主義のデタラメな説を打ちくだき、革命の立場を堅持した。また正にこの故にこそ、『新青年』は当時、革命的知識人の中で極めて高い威厳をもち取り、かれらを共産主義思想の旗の下に団結させ、中国共産党創設の思想上の準備活動において、『新青年』は相当重要な地位を占めたのである。

#### 中国共産党成立後の『新青年』

一九二二年七月一日、中国共産党第一回全国代表大会が上海において開催

された。中国共産党が正式に成立したのである。この時、『新青年』はすでに広州に移っており、正に第九卷第三号を出版していた。党が成立した後、『新青年』は引続いて出版されたが、一九二一年の暮に第九卷第五号を出版した後、一時停頓したが、一九二二年七月には第九卷第六号を出版し、第九卷が終了すると休刊した。一九二三年六月、『新青年』は改組されて季刊となったが、依然として広州で出版され、かつ中国共産党中央の理論的機関刊行物となった。革命運動がちょうど展開されており、人手が足りなかったことにより、季刊を定期的出版することが不可能となり、一九二三年六月に第一期を、十二月に第二期を、一九二四年八月に第三期を、十二月に第四期をそれぞれ出版しただけであった。この後、最初にもどり月刊に改める準備をしたが、実際には定期出版が不可能となり、不定期刊となり、一九二五年四月に第一号、六月に第二号、一九二六年三月に第三号、五月に第四号、七月に第五号のそれぞれを出版したが、われわれが現在見ることができるものはこの第五号までである。

『新青年』が改組されて季刊となった時、党の優れた指導者の一人であり、卓越した理論家であり文学者である瞿秋白同志がソ連から帰国したばかりであったが、かれは即時に『新青年』の主編者と最も主要な執筆者の一人となり、初期の党の宣伝活動のために重大な貢献をした。

季刊『新青年』第一期の発刊の言葉「新青年の新宣言」こそ、明らかにプロレタリア階級の理論的刊行物としての性質を示している。「新宣言」ではこれまでの「雑誌『新青年』は中国革命の産物であり」、かつては「革命思想の代表となった」ことを確認している。同時にまた「中国の眞の革命はやはりただ労働者階級のみがこのような偉大な使命を担うことができる」。こ

のため、『新青年』はやはり中国プロレタリア革命の羅針盤にならざるをえない」と指摘している。ここでは「新青年」は社会科学の雑誌となるべきである、「中国の現実の政治経済的状況を研究すべきである」、「社会改造の真理のために各種の社会思想の流派と討論すべきである」と宣言している。この「新宣言」の中で提唱されたいくつかの原則はかなり明確に改組後の『新青年』の特徴を説明している。

上に述べた如く、改組以前の『新青年』は、早くも一九二〇年にすでに中国共産党上海発起人グループの機関誌となっていたが、依然として多少とも新文化運動統一戦線の形態を保持していた。マルクス・レーニン主義の宣伝はしだいに、その後はますます顯著に主要な地位を占めたが、しかし遂にそれを唯一の内容とするものにはならず、そのまま党が初めて成立した後には出版された三号分まで引き継がれた。つまり、この統一戦線の性格である、ある一部より軟弱な傷跡がまだ完全に除去されていなかったのである。しかし、季刊に改めてからは、それはすでに純粹にマルクス主義思想の宣伝を目的とする刊行物になっていた。特に顯著な現れとしては、それが大量にレーニンとスターリンの著作を紹介したことである。しかもそれがこれまでの『新青年』には見られなかった程の力を入れて行なわれたことである。季刊と不定期刊の間に、全部で僅か九冊の刊行物の中で、発表されたレーニン同志の著作には、「ロシア革命の五年間」（即ち「ロシア革命五周年と世界革命の前途」）、「民族と植民地問題」（コミンテルン第二回大会における演説）、「中国戦争」、「革命後の中国」（新しき中国）、「アジアの醒め」、「遅れたヨーロッパと進んだアジア」、「独裁問題の歴史観」、「独裁問題の歴史について」、「社会主義インターの地位と責任」がある。一九二五年四月に出版された不

定期刊第一号はレーニン同志記念特集号であり、レーニン逝去一周年記念に  
ついでに中国共産党第四回代表大会の宣言を発表している。スターリン同志  
の「レーニン主義の基礎について」は出版されたばかりであったが、大部分  
が『新青年』に訳載された。その他に、さらにソ連共産党第十四回代表大会

でのかれの報告の中でソ連の政治・経済の概況に関する部分と「トロッキズ  
ムか、それともレーニン主義か」等の論文が発表された。この他にも一つ  
顕著な現れは大量に国際プロレタリア革命運動の経験を紹介したことであ  
る。季刊の第一期は他でもなくコミンテルン特集号であり、コミンテルン  
第四回世界大会の文献を訳載し、大会の状況を報道する文章を発表した以外  
に、さらに瞿秋白同志が執筆したコミンテルンの党綱領と戦術・戦略、第一  
インスターからコミンテルンまでの簡潔な発展史を紹介する数篇の長文が発表  
された。この後、各期にも常にコミンテルンに関する報道と文献および各国  
の労働運動の状況を紹介する文章が掲載された。ソ連の革命の経験を紹介す  
る文章が刊行物の主要な地位を占めた。一九二四年八月に出版された季刊第  
三期には当時公布されたばかりの「社会主義ソヴィエト共和国連邦条約・宣  
言」(即ち一九二四年ソ連憲法全文)の訳文が発表された。

季刊と不定期刊の『新青年』の中心課題は民主革命における党の綱領と戦  
術・戦略を理論的に論証することであった。一九二三年六月、中国共産党が  
第三回代表大会を開催し、国民党と合作し、国民党を改組して、民主革命連  
盟のための民族民主統一戦線を結成するという方針を決定した。ついで孫中  
山を援助して国民党の改組をすすめはじめ、労働者と農民の国民革命運動  
を広範に展開し、そのまま北伐戦争等の巨大な革命活動の準備へと直結し  
た。季刊『新青年』はちよつと第三回代表大会が開催されていた月に第一期

が出版され、北伐戦争が始まるまで継続したが、その後ついに停刊した。こ  
の時期には、『新青年』は理論面から党の民族統一戦争の方針および国民革  
命運動に関する一連の戦術・戦略問題を明確にする重任を担っており、宣伝  
において一定の役割を果たした。

季刊『新青年』の第二期は正に党の第三回代表大会の後に出版されたが、  
この号の瞿秋白の「民治(民主)主義から社会主義へ」は、レーニン同志が  
「二つの戦術」の中で明らかにした原理に基づいて、中国革命の戦術問題を  
論証した。かれは一方では張東蓀、梁啓超の偽社会主義者のブルジョア思想  
を詰問し、他方ではまた一部の小ブルジョア階級知識人の「実施するならば  
単一の社会主義的国民運動でなければならない」という空想に反駁し、当時  
の中国の革命はブルジョア民主主義的の革命であると断言した。かれは「中国  
はすでにしだいに資本主義に移行し、民主主義的改革を必要としている。…  
…なぜならば、中国の革命運動あるいは所謂新思想が若干の社会主義的色彩  
を帯びているから、それをもって現時点で必要とされる革命が社会主義的な  
ものであると充分に証明するものではないからである」と書してい  
る。先に述べた如く、党建設準備期と党が成立したばかりの時期には、多  
くの人びとは中国社会の実態に対する科学的認識が欠除していたために、ま  
たも単純に中国革命はプロレタリア社会主義革命だと考えた。瞿秋白同志  
は中国革命の民主主義的性質を明白に論証したので、党外の小ブルジョア知  
識人の空想に反駁・排除したばかりでなく、当時、党内の若干の正しくない  
思想の残滓を除去する上でも助けとなった。これは重大な意義をもつもので  
ある。瞿秋白同志はこの論文の中でさらに一步進んでレーニンが「二つの戦  
術」の中で論証しおえた原理に基づいて、理論上から民主革命におけるプロ

レタリア階級の指導権問題を指摘した。かれは「プロレタリア階級は最大多数の農民と小商品生産者を指導して、民主革命を徹底的に行ない、厳しい手段で君主派あるいは軍閥派の反動を鎮圧し、かつその上にブルジョア階級の後退を阻止しなければならない」と指摘している。この後、『新青年』が国民革命の指導権問題を宣伝する上で比較的顕著な欠点がかつて存在したことは、一部右翼日和見主義者の観点の現れである。季刊第四期にはもっぱら革命の指導権問題を論述した二篇の論文が発表された。彭述之の一篇はプロレタリア階級の指導権をでまかせに論じて、かえってまた民族ブルジョア階級をとるに足りないものと言ひなし、「ブルジョア階級が国民革命に参加しようとしても、それはすでに不可能事に近い」とか述べて、当時の革命的な広州国民党政府を、「ただ数人の新軍閥、新官僚の顔に孫中山のお面をつけた政府にすぎない」と言ひくるめた。このようなかれの論法は実質的には「左」よりの形態をとって、民主革命に対するプロレタリア階級の指導を放棄するものであった。陳独秀は第三回代表大会でかつて、ブルジョア民主革命はブルジョア階級によつて指導されるべきであるという投降主義的傾向を主張したことによつて、大会の批判を受けたことがあったが、一九二四年に季刊「新青年」第四期に発表した文章の中でもこの誤りを真剣に追求しなかつた。かれは形式的にはプロレタリア階級は国民革命の「督戦者」(?)であると述べたが、実際にはかえってプロレタリア階級とブルジョア階級との関係の問題を根本からおおい隠して、問題としてとり上げなかつた。この二篇の文章は陳独秀と彭述之の二人の全思想を説明しうるものではなかつたが、多少ともかれらが道は異なつていても行き着く先は共に日和見主義の泥沼に陥ち入る原因の一部分を露呈していた。

党の民族民主統一戦線の総方針の指導の下で、革命運動が急速に発展するにつれて、一九二六年になると、革命的な北伐戦争はすでに積極的に準備し、かつ実施に着手していたので、革命的武装闘争と革命軍の建設の問題がより一層、党の前に提出されてきた。北伐開始前に出版された不定期刊『新青年』第三・四各期に、瞿秋白同志は「五四」運動と「三一八」弾圧事件の経験の研究を基盤にして、中国革命に対する武装闘争の重要な意義を認識しはじめ、「革命軍を組織・訓練し、武装勢力を拡大し、労働者農民を武装して革命戦争を実行する」という要求を提起した。かれはまた専門論文「中国における武装闘争問題」を書き、「すべてを解決する革命戦争——国民政府の北伐——を実施し……正規の革命軍を主体として、革命作戦に従事せしめること」を指摘した。この時、中央に盤据していた日和見主義者は武装闘争に対して誤まつた観点をもっており、しかも瞿秋白同志の観点は陳独秀等の北伐に対する消極的な態度、革命戦争を提起しないスローガン、労働の武装化を強調せずに、軍閥の軍隊を争奪することを中心することを企む観点<sup>⑧</sup>と対立するものであった。農民問題において、瞿秋白同志の比較的初期の論文では、ただ「農民を組織して、減租減税と相互合作の運動を指導する」ことのみを提唱していたが、その後にはまた「耕地は農民が所有するという目的を指標とする」という（農民から）の要求を補充した。

季刊『新青年』のもう一つの功績はマックス主義の弁証法的唯物論と史的唯物論思想の宣伝を展開したことである。一九二三年、ブルジョア思想界において所謂「科学と人生観との論争」が展開された。この論争は一方には実際に胡適を首領とし、形式的には丁文江を首領とする一派と、他方には張君勱を首領とする一派の二つの主観的観念論者間で展開されたものであつ

た。張君勳はベルグソン主義者であり、かれは人間の意志の自由を公然と宣  
 伝し、人生観に対しては科学的解釈をすることはできないと考えていた。し  
 かし、胡適、丁文江等は玄学に反対し、科学を擁護するという名目の下に、  
 実際には帝国主義の買弁勢力に奉仕する腐敗したプラグマティズム思想を鼓  
 吹していた。この論争はもとはた二派の観念論者との内訌にすぎなかつた  
 が、論争の実際的な意義はかえってこれだけに留まらなかった。この論争  
 において、胡適と丁文江は「五四」新文化運動の大旗「科学」を不法に占拠  
 したのために、この派の勝利はかれらが新文化運動における正統派を自任し  
 て、プラグマティズムの毒素をまきちらす地位を強化することになった。こ  
 れはマルクス主義者として不問に付することできないことであった。この  
 ため、『新青年』、とくに瞿秋白同志はついにこの論争に干渉して、プラグマ  
 ティズムに反対し、マルクス主義哲学の唯物論を宣伝する闘争を展開した。  
 一九三三年十二月、季刊『新青年』第二期に陳独秀の「科学と人生観・序」  
 を発表した。かれは所謂「科学派は決して勝利しない」を批判した。その論  
 拠として「敵の大本営を撃破しうる武器が存在することについて、かれらは  
 元々それを信じていなかったがために、それをいよいよしなかったからで  
 ある」と考えた。かれが指摘した武器とは即ち史的唯物論であった。この文  
 章および第三期に発表された「張君勳および梁任公に答える」の一文で、か  
 れは史的唯物論を主張し、かつこの観点で論争中の問題の解釈をすると宣言  
 した。しかし、かれは胡適と丁文江等が何故、史的唯物論という武器を信じ  
 ず、いよいよしなかったかについて決して理解していなかった。それとい  
 うのも、かれは胡適一派が鼓吹し、信奉しているプラグマティズムこそ最も  
 反動的で、しかもまた最もベテンの役割を担う主観的観念論であり、マルク

ス主義哲学と真向うから敵対するものであることを理解していなかったから  
 である。たんにこれだけではなく、かれ自身もやはりプラグマティズムの影  
 響を深く受けていたからであった。かれもまた論争における問題に対して史  
 的唯物論的解釈を下すことができなかったばかりでなく、実際にはまた観念  
 論的な観点を少なからずもっていた。陳独秀の論文は一般的には史的唯物論  
 を提唱して論戦中の両派と対立した。これは良いことである。しかし、かれ  
 にはプラグマティズムの幻惑的宣伝を完全に暴露する力量がなかったため、  
 かれには論争に対して完全に正しい批判を下すことが不可能であった。

この論争に対して正しい批判を加えたものは瞿秋白同志であった。かれは  
 季刊『新青年』において哲学論文「自由世界と必然世界」を発表し、張君勳  
 の「科学は因果律によって支配される。しかるに人生観は自由意志によるも  
 のだ」というこの観念論の謬論にすべく対立し、社会現象にも同様に客観  
 的法則が存在することを指摘し、かつ「自由と必然」というこの弁証法的唯  
 物論の範疇の原理に基づいて自由意志の問題を解釈した。かれは「社会現象  
 にも確かに追求すべき因果法則が存在する。ただこの因果法則の『必然』を  
 知ってこそはじめて、この因果法則の『自由』を応用しうるものである」と  
 指摘し、張君勳の観念論的自由意志観を徹底的に打破した。しかし、この論  
 争におけるかれの功績は張君勳に対する批判であったというより、むしろか  
 れがプラグマティズムの偽科学の観念論の本質を徹底的に暴露したというこ  
 とにある。張君勳が観念論を公然と宣揚したことはもとより極めて反動的な  
 ことである。しかし、胡適と丁文江等が科学を擁護するとの名目を借りて、  
 あの主観的観念論の実質的な容貌をおおい隠してプラグマティズムを宣伝し  
 たことの方がかえってさらに悪辣であり、当時においてさらにはさらに大きな幻惑

的役割を担っていた。この幻惑的宣伝を徹底的に粉碎することこそ胡適等が五四時代の「科学」という大旗を不法占拠しようとする陰謀を打破し、五四運動の革命的伝統を継承し発展させることを意味している。このため、季刊『新青年』第三期に瞿秋白同志は論文「経験主義と革命哲学」を発表した。

かれは胡適の「問題をより多く研究し、主義をより少なく語る」ことの反動的本質、「労働者階級がいかなる社会主義とも無関係となるようにし、諸君の目前の難題を解決するようにすれば、それでよいのだ」ということになる。

そこで、皆は理由も考えずにただひたすら働きつけ……「労働者階級をブルジョア階級の後に追従させ、しかも『妄想』するに至らない」ようにさせるという本質を深く掘り下げて指摘した。かれは経験主義が「改良派」であることを指摘した。かれは経験主義者の教祖ジェームスの理論を引用し、かつ手きびしい批判を、とくに真理論について批判を加えて、「経験主義にとっては、絶対的な現実が存在しないばかりか、客観的な現実さえも存在しない。その結論は完全に観念論的宇宙論である」と指摘した。このように、かれはプラグマティスト胡適、丁文江一派の科学擁護という人を欺く外衣を剥ぎとり、「プラグマティズムが科学的方法を伴って中国にやって来たというのは、実は歴史的誤解である。」と書いた。このため、かれはブムグマティズムはマルクス主義に極めて近いものと考えている誤解と混同に対して、進んで反駁し、理論上からマルクス主義哲学の弁証法的唯物論の観点とプラグマティズムの「有益な」観点の本質的な差異を指摘し、また実際の応用面では、マルクス主義は革命を指向するが、プラグマティズムは妥協を指向するものであることをも指摘した。この論文は中国現代哲学史上においてプラグマティズムの反動思想を徹底的に暴露した最初の文献である。

この両期の『新青年』にはマルクス主義哲学の基本的観点を明解に述べた若干の論文が発表されたが、これらの論文もまた所謂「科学と人生観」論争における問題に関係するものであった。

要するに、季刊・不定期刊『新青年』は党の幼年時代中期に出版された。この時期の革命運動は党の正しい路線の指導の下で極めて大きな発展と勝利を収めた。この時期の『新青年』は「五四」前後の戦闘的伝統を発揚し、かつ純粹のマルクス・レーニン主義の刊行物に変え、党の最も初期の理論的機関刊行物の一つにしてしまったのである。それは革命が急速に展開している時期の党の路線と戦術を宣伝し、統一戦線の方針を貫徹し、かつマルクス・レーニン主義の重要著作と国際労働運動の紹介に大いに力を注ぎ、反動的プラグマティズム思想に対して敵しい批判を展開して、極めて大きな功績を挙げた。ただ、この時期の党は窮局的にはまた幼年期の党であったため、『新青年』はその宣伝においても若干の不明確乃至は誤まった観点がやはりまぎれこむことを免れえなかった。これは当然その功績とは区別されるべきものである。

#### 『新青年』とジャーナリズム活動

『新青年』は一九一五年から出版が開始され、一九二六年に停刊され、前後通算十年以上も存在し、中国現代革命の新聞雑誌史上の最も重要な刊行物の一つである。『新青年』の十年は歴史的意義のある十年であった。この十年間に、中国革命は旧民主主義段階から新民主主義段階への移行を完成させ、中国共産党を創立し、かつ巨大な規模の国民革命運動を揺り動かした。この十年間は思想闘争が極めて複雑で、その上激烈な時期であり、しかも最

後にはマルクス・レーニン主義の勝利と新文化運動統一戦線の分裂が基本的に完成されたことをその特徴とするものであった。『新青年』はこの十年間の思想運動の主要なる中心であった。それは豊富な思想史と政治史の資料を保存しており、五四新文化運動、中国におけるマルクス主義の伝播、中国共産党の建設とその初期の理論活動を研究する上での重要な資料である。以上の各節での分析からも理解できるように、『新青年』の発展は大体次の三段階に分けることができる。第一段階は大体、一九一五年から一九一八年までである。それは封建主義反対の前期新文化運動の中心であり、急進的民主主義者の戦闘的旗手であり、それが全力で推進した封建主義思想に反対する闘争は客観的には中国におけるマルクス主義の伝播のために一部の障害物を除去する役割を果たした。このため、それは中国労働者階級のマルクス主義刊行物の先駆であると言うことができよう。第二段階は一九一九年五四運動前後から中国共産党成立当初までである。それは民主主義的刊行物からしだいに社会主義的刊行物に変わり、マルクス主義を伝播させる上で重大な役割を果たした。その後期には、その上に中国共産党上海発起人グループの刊行物として、反マルクス主義的なブルジョア、小ブルジョア思想の各流派と理論上の闘争をしたことがあり、思想面から中国共産党の建設を準備する上で積極的な役割を果たした。第三段階は中国共産党が成立した後、それは改組されて党中央の理論的な機関刊行物となり、マルクス・レーニン主義の革命理論の宣伝、革命的統一戦線の樹立と第一次国内革命戦争における党の戦術・路線の理論面からの論証において一定の成果を収めた。それは中国共産党設立の準備時期および党の幼年期に出版されたことにより、その前期には各種の異なった思想の流派が包括されており、その後期にはマルクス主義宣伝にお

いて若干の誤りと混乱した所もあったが、これらの欠点はその基本的功績を掩蔽しうるものではない。

政治史および思想史における『新青年』のこのような重要な地位は、他でもなく新聞雑誌史にそれが重要な地位を占めていることの最も格好の説明である。その歴史はマルクス主義のジャーナリズム活動についての基本原理を十分に証明しており、新聞雑誌は一定の階級あるいは集団の手中に掌握された有力な武器であり、進歩的で革命的勢力を代表する新聞雑誌は何んと偉大な宣伝・鼓舞の役割と組織的役割を果たしうるものであるかを証明し、新聞雑誌こそ一種の政治的組織の中心であることを証明した。同時に、その歴史もまた新聞雑誌は現実の革命闘争と緊密に連系して一体となり、自覚して革命闘争に奉仕してこそ、はじめてその歴史的役割を發揮しうることを証明した。実際から遊離し、革命闘争の外に超然とすることを妄想するものは、いかなる企みであれ、すべてジャーナリズム活動の袋小路であり、かつその上に常に反革命勢力が革命的新聞雑誌を破壊しようとする時に用いるスローガンである。これらは皆すでに上述した通りである。『新青年』の思想内容についての分析で十分に証明されている以外に、さらに『新青年』編集部組織上の変遷からも他の側面の説明を探し出すことができるであろう。

『新青年』第一巻の名称は『青年雜誌』であり、この時にも科学と民主主義のスローガンを提唱していたが、まだあまり大きな影響を及ぼしていなかった。この時期の刊行物の編集者は陳独秀であり、主なる執筆者には高一涵、劉叔雅等がいた。一九一六年の終りには、蔡元培が北京大学の学長となり、陳独秀は文学部長に就任することが決り、刊行物の編集部は北京に移り、しだいに北京在任の進歩的知識人と結合しはじめ、反封建的新文化運動

いて若干の誤りと混乱した所もあったが、これらの欠点はその基本的功績を掩蔽しうるものではない。



がしだいに始まり、刊行物もやっと広範な知識人大衆の歓迎を獲得しはじめた。一九一八年一月の第四巻の始めから、「すべての創作・翻訳の原稿は、ことごとく編集部同人が共同で担当し、他からの寄稿を求めない」と宣言したことにより、同人雑誌の形態をそなえることになった。この時の経常的寄稿者にはすでに李大剣、吳虞、錢玄同、陶孟和、劉半農、沈尹默、胡適等が加わっており、魯迅も第四巻から執筆しはじめ、反封建的新文化運動の戦線がすでに形成されはじめた。一九一九年の『新青年』第六巻から、『新青年』社は編集委員会を設立し、この巻は第一期から第六期まで陳独秀、錢玄同、高一涵、胡適、李大剣、沈尹默の順で各一期づつ主編者を分担することを宣言した。しかし、実際には、このような編集者の輪番制の方法はこれ以前にもうすでに実施されはじめており、ただ編集委員会の形態は固定化されておらず、とりわけ上述の六人に限定されておらず、たとえば魯迅も編集委員会の参加者の一人であった。要するに、この時期には、『新青年』は内容面において新文化運動の中心であったばかりでなく、そのメンバーには当時の左、右、中立の三派の知識人が含まれており、組織面でも新文化運動の統一戦線を具体的に体現していたのである。

五四運動以後、新文化運動の統一戦線の分裂がしだいに始まり、第八巻第一期になると、『新青年』が党の上海発起人グループの機関刊行物となるに及んで、この分裂は顕著になった。当時の『新青年』には「本誌は第八巻第一号より、編集部同人が自ら〈新青年社〉を組織し、編集、印刷、発行のすべての業務を直接に行なう」という社告を掲載した。この「新青年社」は当時の上海のフランス租界に設けられ、実質的にすでに上海の共産主義者の組織の機関になっており、月刊『新青年』を出版しているだけでなく、さらに

社会主義を宣伝する叢書を編集・印刷し、『労働界』『伙友（仲間）』等の通俗的な労働者の刊行物を出版して、労働者大衆と連系する機関になっていた。この時、編集部に参加して活動する者には陳望道等が加わり、経常的な執筆者に李達等が加わった。これらの人びとはそれ以後それぞれ異なった変化をしたが、当時はすべて積極的なマルクス主義の宣伝者であり、陳望道は実際に編集の仕事を担当していた。この時、上海の「新青年社」は北京の「新青年社」社員と陳独秀によってまだ連絡が保たれていた。しかし、かれらの中の一部の者はすでに表面的には協調しているようではあるが、実際には益々離反していた。『新青年』がマルクス主義とロシア革命に対する宣伝を強化した後、胡適の強固な反対にあった。かれはそれまでは北京の新青年社員の中で積極的に活動して、『新青年』はほとんど Soviet Russia の中国語版<sup>⑤</sup>になったと言いふらし、『新青年』の編集を「北京に移転して出版し」、「學術思想……の改造に意を注ぎ、政治を語らないことを声明する」よう主張したが、実際は『新青年』を完全にかれの支配の下に置き、プラグマティズム宣伝の刊行物に変質させようとしたのである。しかし、この活動の目的は達成されなかった。『新青年』が第八巻第六号を出そうとして、植字にまわされていた原稿がすべて帝国主義の租界警察によって没収され、広州であらたに出版せざるをえなくなった。第九巻になると、『新青年』に体现されていた新文化運動の統一戦線の分裂は深まり、刊行物の統一の様相もしだいに消失し、時にはまだ胡適の文章も発表されていたが、それはすでに大局に何の関係もない詩文にすぎなかった。一九二三年に季刊『新青年』が新しいスタイルで出版された時には、まったく完全に旧『新青年』編集部の右翼とは連系がたち切られていた。要するに、組織面における『新青年』の変化もまた

五四新文化運動の統一戦線の形成と分裂の全過程を充分に表現するものであった。『新青年』編集部が無形思想文化運動の中心から有形の社会主義の革命的機関に変化したこともまた、革命的ジャーナリズムの組織としての役割を具体的に証明している。これらの歴史的経験がジャーナリズムについてのマルクス主義の原理をあざやかに証明したことは、新しい世代を教育するジャーナリズム関係者に対して、さらに現実的な意義をもつものである。

『新青年』はまたジャーナリズム活動における勇敢な革新者であった。先に、『新青年』は口語への移行と新式標点符号の採用において創造的役割を果たしたことをすでに指摘したが、これは新聞雑誌史上の極めて重要な革新であった。『新青年』編集委員会の合議制およびそれに表われている民主的精神はそれまでの重要な新聞雑誌には見られなかったものである。これ以外に、『新青年』はさらに若干の分野においてわれわれに有益な経験を残してくれた。特に注目に値するものはその尖鋭的な戦闘性と論争における妥協しない精神である。この精神は封建主義文化に反対する闘争の中で明瞭に表われている。これは当時の民主主義思想の徹底性の一面を反映している。当時の『新青年』の何人かの主だった執筆者たちは敵対する思想・文化の反動性の主だった表現をしっかりと掌握して断固としてたゆまずに繰返し暴露し打撃を与え、敵の最も醜悪な一面を人民大衆の面前に明らかにすることに長じていた。このようであったので、かれらはあるいくつかのさほど重要でない問題において誤まった見解をもっていることすらあったにも拘らず、最終的には敵に致命的打撃を与えることができた。五四時代は名だたる「百家争鳴」の時代であったが、『新青年』の経験は、百家争鳴は思想闘争を緩和するということではなく、正に思想闘争の強化を想定するものであり、「百家

争鳴」は思想闘争に対する編集部の指導を緩めることではなく、正にその反対に、あの「是非を論ぜず、真理を隠蔽する」態度に反対すべきものであった。このような経験は今日のジャーナリズム関係者に対してもなお現実的意義をもつものである。第二に、『新青年』も読者と執筆者との連系を考慮していた。第一巻第一号から、「通信」欄が特に設けられ、編集者と読者と執筆者との往復書翰を掲載した。この欄は反封建の思想闘争の中できわ立った役割を果たし、『新青年』における最も生き生きとし、最も稔りある部分の一つであった。この欄に発表されたいくつかの書信は当時の進歩的青年が変革を求めるとの心意気を反映しており、さらには『新青年』に宣揚された若干の観点を明らかにし、何人かの読者と同志的な討論を展開し、また敵対思想の持主に対しては容赦のない攻撃を加えた。この通信の中から重要な新しい論題を引き出すことになり、また新しい経常的な寄稿者を吸収した。『新青年』がある一定期間に大衆の連系を極めて考慮した精神は、われわれが尊重すべきものである。

#### 註釈

- ① 本文の原題は「五四時期にマルクス主義を伝播した重要な刊行物——『新青年』」である。かつて『新聞戦線』一九五八年第一、二期に掲載されたものであるが、本訳文は『五四時期期刊紹介』第一集（一—四〇頁）人民出版社・一九五八年によっている。李龍牧氏が執筆したものである。
- ② 『青年雑誌』第一巻第一号の「通信」欄、「王庸工に答えるの書」
- ③ 『青年雑誌』第一巻第五号、陳独秀「一九一六年」を参照。
- ④ 『新青年』第二巻第二号「康有為の總統總理に致した書に反駁する」、同第三号「憲法と孔教」、同第四号「孔子の道と現代生活」、「袁世凱復

活」、同第五号「再び孔教問題について論ず」、第四卷第三号「康有為の共和平議に反駁する」、同第六号「尊孔と復辟」などの諸論文参照。

⑤ 五四運動以前の陳独秀の略歴は次のようであった。陳独秀は青年期は反滿革命派であり、かつて蕪湖で口語文の新聞を編集したことがあった。一九〇三年、上海で革命的新聞『国民日報』の主筆者となった。辛亥革命後、一九二二年、安徽師範学堂の校長（一説には教務主任）となる。時の安徽都督は柏文蔚であり、かれは柏文蔚と特定の関係にあって、柏は同盟会の会員であったが、陳独秀が正式に同盟会に加入していたか否かについては未だ確証がない。ある人は、かれは当時、安徽教育司長（教育庁長官に相当する）と言っているが、これも確証がない。一九二三年、袁世凱反対の闘争が失敗した後、陳独秀は東京に逃れる。一九一四年、章士釗を助けて『甲寅月刊』を発行する。間もなく上海に帰り、一九一五年、『青年雜誌』（即ち『新青年』）を創刊する。

⑥ 『新青年』に発表された魯迅の文章はそれぞれ『吶喊』『熱風』『墳』に収められている。他の一部分は『集外集』に収録されている。

⑦ 小さな事ではあるが、北京の一城門、即ち現在の和平門を開門することについても、かつては「總統府」の「風水（墓地や家屋の方位や相を見て吉凶を判断する迷信）」の妨げになるという口実で、長期間開放が阻止されていた。

⑧ 『新青年』第四卷第五号所収、陳大齊「靈学をしりぞける」参照。

⑨ 『新青年』第三卷第一号「対独外交」、第三卷第四号「時局雜感」、第五卷第一号「今日の中国の政治問題」参照。

⑩ 「大ゲルマン主義」「大スラブ主義」を指す。

⑪ 現在ではマルクスは「馬克思」と表記するが、当時は「馬客士」と表記されていた。ここではマルクスをボルシェヴィズムの源流であることを指摘するにとどめてはいるが、しかし、当時としてはそれは非常に重要なことであった。当時は、たとえ進歩的思想界にいる人たちでも、十月革命に対する認識には限界があった。たとえば、蔡元培は当時、進取

派の大御所と目されていたが、その同じ号の『新青年』に発表されたかれの「欧州大戦と哲学」の一文では、なんとレーニンとはトルストイの抵抗主義を信奉していると述べている（これは大体において日本から伝来した聞きかじりの説であろう）。しかるに、『新青年』ではこの誤りを指摘していない。一般の人びとについては推して知るべしである。

⑫ この号の一部の主なる論文はよくないものであった。たとえば、第一論文「マルクス学説」の筆者、顧兆熊は、後には国民党改組派の重要人物となった顧孟余であり、この論文は明らかにベルンシュタイン主義に同調するものである。第二論文「マルクス主義批判」の筆者、凌霜は、当時は無政府主義者であったが、後に国民党CC派の小ボスの一人に変質し、所謂十教授宣言に参加した黄文山である。かれはこの論文の中で自分がベルンシュタインとクロボトキンの見地からマルクス主義を「批判」することをあからさまに明言している。この外にも、さらにいくつかの曲解やこじつけの論がある。このため、この特集号全体に対して、必ずしも内容的に妥当なものでないことを過度に強調しておく。

⑬ 『胡適文存二集』第四卷一〇〇頁を参照。

⑭ 「淑世主義」は改良主義思想の中で最も露骨な反動思想の一つである。それは主観的觀念論社会学の基礎の上に築かれたものである。この理論は社会を人びとの個人的意識の産物であると見なし、階級存在を根本的に否認あるいは回避するものである。社会の改善はただ社会構成員の個人的改善という方法によってのみ次第に到達しようというデータメナ説を鼓吹した。しかるに実は、これから資本主義制度は永久に存続するという結論を導き出している。「淑世主義」というこの用語は十九世紀のイギリス女流作家ジョージ・エリオットとイギリスの実証主義者ジョン・サールが著作の中で用いたのが始まりである。プラグマティストのジェームスがかつてこの主義を大いに鼓吹したことがあるが、胡適の「淑世主義」こそはかれから仕入れてきたものである。

⑮ 陳独秀は相当長期間、荒唐無稽にもプラグマティズムと史的唯物論とは

相互に共存しうるものであると考えていた。そのあげくには、長い間、胡適に史的唯物論を信奉するように勧告することを企てていた。当時の「新青年」社の他の人びともプラグマティズムの危険性をそれ程充分には理解できていなかった。

⑯ たえば、第八卷第三号にはレーニンのソ連共産党第八回大会での「党規約についての報告」の一部分が掲載されたが、標題は「民族自決」となっている。同第四号にレーニンの「プロレタリア階級独裁時期の経済と政治」が掲載されたが、標題は「過渡時期の経済」となっている。

⑰ 「研究系」とは梁啓超をはじめとする政治グループであり、その前身は袁世凱執政期の進歩党である。主要なるメンバーは清末の立憲派分子であり、一貫して改良主義政策をとっていたが、実際には北洋軍閥支配を擁護する役割を果たしていた。五四運動以後、この一派の一部の者は社会主義の名を借りて社会主義に反対することを始め、後には発展して張東蓀をはじめとする反革命的な「国家社会党」即ち「民社党」となった。

⑱ 『時事新報』は一九一一年に、一九〇七年創刊の『時事報』と一九〇八年創刊の『輿論日報』が改編、合併されたものである。五四運動期には『学灯』という副刊(附録)を出したが、これと前後して同時に発行された『民国日報』の副刊『觉悟』、『北京晨报』の『副鑄』、『京報』の副刊とともに「新文化運動における四大副刊」と称された。だが、この四副刊の態度と新文化運動に対する貢献度は同じではなく、かつそれぞれ副刊も終始一貫した態度をとってはいなかった。この四紙の中で、『晨报』と『時事新報』はともに研究系と密接な関係をもっていた。

⑲ 半月刊『解放與改造』は一九一九年九月に創刊された。主なる責任者は張東蓀である。自ずから「新しい学界」の出版物であると称し、出版宣言では改良主義のスローガンを標榜していた。出版一年後に「改造」と改名した。梁啓超が発刊の辞を書いたことにより、改良主義の方針はさらに具体化した。文章は『飲冰室文集』第十二集に見える。

⑳ ボルシェヴィズムを指す。

㉑ 張東蓀は当時、哲学上ではプラグマティズムとは異なるが、主観的觀念論に属するベルグソン主義者であった。しかし、政治面ではかれらは一貫していた。張東蓀は「われわれはいやしくも大多数の人が人間並みの生活を得たならば、主義を空転させることはしない。(たとえそうしたとしても)その結果は必ず得るところはないであろう」と述べているが、それは胡適の「より多く問題を研究して、主義を論ずることをより少なくする」という論調の陣営と相呼応するものであり、まったく軌を一にするものである。

㉒ ラッセルはイギリスの觀念論哲学者である。第一次世界大戦の時には、平和主義の立場に立って戦争に反対したので、一度は社会主義者と見なされたことがある。十月革命勝利後、かつてイギリス労働者代表団とともにソ連を訪問したが、ひとたびソ連を離れるや、意のままに反ソ的言論を発表した。かれが中国に「講演」にやってきたのは正にソ連訪問後のことであり、帝国主義的思想家たちが中国におけるマルクス主義の伝播を阻止しようとする一連の活動の一構成部分であった。しかも張東蓀等の反社会主義論は、その基本的論点が正にラッセルが中国で宣伝した一連の論調の中から剽窃したものである。

㉓ 『飲冰室文集』第十三集に見える。

㉔ 梁啓超は「資本家に警告し、その自覚を喚起し、常に労働者の利益を顧慮せしめ、それによって労資両階級のミソをなくすように誘導せよ」と主張した。これが資本家に対する「態度の矯正」であるとかれは述べている。かれがこのような矯正の手段の実現に用いようと企んだものが「政府の立法」であり、「社会的監督」であった。

㉕ これはこの論戦の総体的な情勢について述べたものである。当時、マルクス主義擁護の立場に立って、この論戦に参加した主だった人びとには李達同志および陳独秀、李汗俊、李季、周仏海などがある。陳独秀等は後には恥ずべき裏切り者乃至トロッキスト、漢奸になった。論戦にお

けるかれらのそれぞれの個人的、具体的論点には、やはりいくつかの極端に荒唐無稽な怪論が含まれていたが、これもかれらのその後の裏切り行為と一定の関係がある。この事について詳細に論ずることは本論文の紙幅では許されないし、また十分に必要なことでもないので、ここでは省略する。

- ㉞ たとえば『新青年』第九卷第二号に発表された李達執筆の「マルクス派社会主義」の論文では、「マルクス派社会主義」は「正統派社会主義」（カウツキー派を指す）、「修正派社会主義」（ベルンシュタイン派を指す）、「労働組合主義」、「組合社会主義」（ギルト社会主義を指す）および「多数派主義」（ボルシェヴィズムを指す）を包括すると考えていた。
- ㉟ ラッセルの思想宣伝の面では、最も積極的な論者と訳者は張中府であった。当時は張崧年、張赤と名のり、『新青年』と『每周評論』の社員であり、常任執筆者の一人である。中国共産党が成立したばかりの頃、かれは一度は党内にもぐり込んだことがある。抗日戦争中は中国民主同盟に加入したが、第三次国内革命戦争の時期には、中国民主同盟華北総支部の解散を公然と宣言し、裏切り活動を行なった。
- ㊱ 中国共産党第四期第三次中央拡大執行委員会議決議案中の出版物に関する決議案では、『新青年』を「中央理論機関誌（原文では『報（新聞）』となっている）」であると称している。この決議は一九二六年九月になされたものである。
- ㊲ 人民出版社影印本の第九巻の説明では「一九二一年に中国共産党が成立し、一度、この雑誌が機関の刊行物となったことがある」と述べている。影印本の季刊には別の説明が附されている。ここで述べていること

は第九巻第四一六号を指している。この期間の『新青年』にはまた胡適などの詩文が発表されていた。

- ㊳ 原書の民族問題の第一章の訳文が発表されたが、標題は「レーニン主義の民族問題の原理」となっている。瞿秋白は原書の第一、二、三、四、八の各章の大部分を訳述したが、発表時には総題目として「レーニン主義概論」と名づけている。
- ㊴ ここで論駁排斥しているものは、北京の「マルクス主義研究会」が出版している月刊『今日』に現れた論調に対するものである。この月刊誌は一九二二年二月に創刊されたが、党成立前の北京の共産主義的知識人が組織したマルクス主義学会とは何んらの関係もない。
- ㊵ 不定期刊第五期の陳独秀執筆の「世界革命と中国民族解放運動」に見える。
- ㊶ 『中国近代出版史料』第二篇の注釈による。鄧孟鄰の言によれば、『青年雑誌』が出版されたころは、「販路はきわめて狭く、寄贈・交換を数に入れても、一回に一千部印刷するだけであった。民国六年になると販売部数もようやく増加し、最高時には一万六千部に達した」。
- ㊷ 魯迅はかなりの文章たとえば「守常文集序」の中で、『新青年』編集部の会議中の情形について記している。『新青年社』の重要問題の決定には、魯迅も参与していたのである。
- ㊸ 週刊誌「ソヴェト・ロシア」は当時ニューヨークで出版された進歩的刊行物である。『新青年』にその資料が訳載されたものは比較的多い。
- ㊹ 経過については『中国現代出版史料甲篇』、『新青年』問題についての数通の書信」に見える。